



黒船の前触れ

ウィーン・・・

「うーん、今日もつかれたあ～」

リトルウィング内のマイルームの一室。

任務を終えたメアンは、毎度の私服であるメイド服を身にまとい、疲れた素振りを見せつつ入ってきた。

ギラム達の活動するパーティ『ジュライ☆エターナル』に所属となってから、かれこれ1か月が経った。

今ではおなじみの様にメイド服を着て彼等の前へと現れ、そして依頼に行くこともしばしば。恐怖の晩餐会ともなりうる、味覚を狂わせ消し飛ばすほどの料理も、毎度の様に振る舞っているのであった。

何度も言うておくが、彼女に悪意はない。

「お疲れマスター ランチ出来てるぜ。」

そんな彼女が帰宅すると、部屋の奥にいた彼女のパートナーマシンリーであるラスベリーは、小さなエプロンを身につけ主であるメアンに告げた。

メアンが依頼等々で不在にしている時の食事当番は常に彼の仕事であり、今日も疲れて帰ってくる彼女のためにと料理を作っていた。

礼儀正しいのかマナーなのかは解らないが、お手製の桃色のエプロンが白いボディに似合っていた。

「やった～！ 今日は何々？」

「オムライスだぜ。」

「あ、ベリリーの得意料理だね！」

自室のテーブルがある場所へと移動しつつ、メアンは今日のランチを訪ねながら着席した。

問いかけに対し彼はそう答えながら彼女を座らせ、近くに置いてあったウォーターポットを手に取りグラスに注いでいた。

水が注ぎ終わると、彼女は笑顔でスプーンを手にし合掌した。

そして、

「いっただっきまーす☆」

無邪気な笑顔を見せつつ、彼女はオムライスを頬張るのであった。

とても平和な日常がそこにあり、すでに彼女もパーティのメンバーからは認められる存在になっていた。

メイドの面では中々そうは行かないが、同じ軍事会社に所属する傭兵達にも腕を認められ、時々依頼に参加する事もしばしば。

ギラムと同じ稼ぎ頭になる事は遠いものの、それでも1人の『傭兵(戦闘メイド)』として認知されている。

無論彼女の腕前もすでに彼等の耳に入っているため、味見を頼むと皆して遠慮されてしまう。

そのため彼女の行く先が常に『ギラム』となりつつあるのが、彼の日常に困った日課が追加されてしまったようにも見える。

とはいえ、彼も彼で腹を下す事も無いため、メアンも心配はしていないのだった。

「んー 美味しい♪」

任務の後のランチという事もあってか、一流料理を口にしたような表情と感想をメアンは言った。

見た目は普通のオムライスではある物の、ケチャップライスの上に乗る卵は今にもとろけそうな艶のある光沢。

少しスプーンで切れ目を入れれば、表面を輝かせていた半焼き卵が静かにライスの元へとやってくる。

卵を上手く焼く事も慣れなければ難しいのにも拘らず、ラスベリーは常に美味しい料理を彼女に振る舞っている。

ちなみに、味や腕前は元々プロ流というのは、補足で付け加えておこう。

「よかった。 喜んでもらえて。」

「アタシも何時か、こうやってご主人様に言ってもらえるくらいになるんだー ベリリー、一緒に頑張ろうねっ！」

そんなメアンの様子を見て、ラスベリーは笑顔で返事をしつつ微笑んだ。

感想を互いに言い合うと、メアンはいつもの様に未来の自分の姿を夢見ながら食事を口にする。

それに対しラスベリーはいつもの様に何をしなければならぬのかを言うと、彼女は生返事を返すのであった。

2人の居る空間はいつものランチタイムの空気に、包まれていくのであった。

すると、

『ハイ！ グラールチャンネル5、ニュースキャスターのハルです！』

食事を開始した直後、2人の居た部屋に備え付けられていたスピーカーから声が飛び出し、周囲に映像が展開された。

その声を聞き、メアンとラスベリーは映像へと視線を移した。

そこには紫色を主体とした衣服を身に纏うニュースキャスターの女性の姿が映っており、笑顔で画面の向こうで自分を見ている相手に手を振っていた。

彼女の名前は『ハル』と言い、グラールチャンネル5の看板キャスターである。

『今日のニュースを、ピックアップ！』

すると画面に映るハルは画面奥にある画面を見せる様な仕草をし、映像を大きくするように手を招いた。

彼女の手につられるように小型の画面が動き、映像が変わりニュースが流れ出した。

『先日惑星パルム内にあるGRM本社から、所属していたパートナーマシナリー達が行方不明になるという事態があった事を発表しました。原因はいまだに不明のため、所属する製品所持者達に注意を呼びかけています。』

「うわぁ、怖いな～・・・ ベリリー、居なくなったりしないよね？」

オムライスを口に運ぶのをやめ、メアンは向かいの席に座っているラスベリーに言った。

ニュースで流れている『パートナーマシナリー』とは、今彼女の目の前に居るラスベリーの様な存在の事でありリトルウィングに所属する傭兵は大抵1人に付き1体所有し自室の管理を任されている。

種族としても名が上げられている『キャスト』と同じ製作段階を踏んでいるが、差別化を図り『特定の作業のみを行う個体』を『マシナリー』と呼んでいる。

彼もまたその内の1人であり、所属された主人の求める行動しか基本的には行わない。

アリンの様な人格を持っているとも言えるのだが、彼女の様に『キャスト』として呼ばれる事も扱いも受ける事も無い。

「大丈夫、マスターを捨てるような事はしないさ。ミーとユーとの仲だろ？」

「そうだね！ これからも、一緒にお料理しようね！！」

しかしそんな事は彼等にとってどうでも良い事であり、自分にインプットされた行動のみを行う事を優先順位としている。

それ以外を行う事は彼等も望んでおらず、自ら別の思考回路を造り行動をする事も無い。

埋め込まれたデータのみを行う、精密機械であり1体の相棒なのだ。

ラズベリーも同様の考えを持っているため、何を言っても成長が見られない彼女に勘当する事もないのであった。

ウィーンンンン・・・ プシューー・・・

「ふう、ようやく止まったか。」

一方その頃、惑星ニューデイズに存在するアガタ諸島の先にある小さな廃寺院では、寺院内で行動していたマシナリー達の止まる音が聞こえていた。

その場に居たのはメアンとは別の仕事に出ていたギラム達であり、相棒のフィルスターと共にアリンとウィンドベルもおり、4人でその場に赴いていた。

彼等の元にやって来た依頼は暴走気味の『バイシャ』シリーズを止める事であり、甲乙ある種類問わず彼等は暴走を食い止めるために来ていた。

その際壊しても良いと言う事になっていたため、比較的派手に行動したためか、破損状況が目立っていた。

「熱源反応は、全部途絶えました。 アリンさん、お怪我は無いですか？」

「ええ、大丈夫よベルちゃん。 ギラムさんがほとんど倒してくださったので、私は安全に行えました。」

使用していた武器をしまうと、ウィンドベルは近くに居たアリンの元へと向かい身体に損傷が無いかと気にかけていた。

しかしそんな彼の心配もないほどに彼女は無傷に等しく、同行していたギラムの援護をしていた事もあってか、被弾は基本無い。

感謝しながらギラムの元へと向かい、彼に静かに笑みを見せた。

「『難なら壊しても良い』って言ってたから、主も派手にやったよなー お転婆メイドの時はなーんも出来なかったし、身体が暇を持て余してたんじゃないか？」

「まあ、それもあるかもな。あの時は様子見ることくらいしか出来なかったから、俺もどっかで満足してなかったのかもしれない。」

そんな彼の元にはフィルスターがライフルを担ぎながら主人を見ており、軽く小馬鹿にする様な言動を口にしていた。

小馬鹿にされた主人は否定する事なく同意し、先日の行動で左程自分から率先して行動する事が今日の結果に結びついたのかもしれないと言った。

とはいうものの、実際には4人全員で協力して依頼を片づけたに等しい。

先導を切っていたのはギラム本人だが、彼も目立つ怪我等はしておらず比較的疲れも感じさせないほどに元気だった。

種族柄といえはそれで片付いてしまうのかもしれないが、手を抜いて行動していないのも事実。それだけ、仕事熱心なのであった。

「さ、そろそろ帰還しようか。 依頼の報告は、俺からしておくぜ。」

「あっ、ギラムさん。 以前貴方に全てをお任せしてしまったので、今回は私に任せてもらえませんか？ 不得手な部分は有りますが、私も慣れておかなければいけませんので。」

依頼を片付け終えた事を確認すると、ギラムはそう言いマイシップを止めた場所へと引き返そうと言った。

すると近くに居たアリンが彼を呼び止め、コロニーで行う作業を任せてもらえないかと提案した。

前回の彼女の依頼も彼が面倒事を全て引き受けた事もあり、アリン本人がギラムと共に行った依頼をクラウチの元へ報告へ行ったことは無い。

まだまだ経験不足な面もあるため、個人的に補いたいのだろうと思われる言動だった。

「ああ、構わないぜ。 フィル、ベルの端末に依頼のデータを送っておいてくれ。」

「了解主ー」

そんな彼女の意気込みを聞き、ギラムは依頼のデータを彼女の相棒であるウィンドベルの元へ送るようフィルスターに指示した。

主人からの命に返事を返しつつ、フィルスターは即座に送るべきデータを纏め送信していた。

データを送り終えた事を彼の口から聞くと、4人はその場を後にして行った。

『・・・』

そんな彼等が寺院の広間を後にしたのを見届けると、彼等の死角に居た影が静かに動いた。影は壊れたマシンリーの元へと向かうと、静かに屈み何かを調べる様にマシンリーの破損状況を見ていた。

表面には武器で殴られた跡と削れた跡があり、所々にテクニクによって焼け焦げた跡等々があった。

『これで奴等のデータは揃った・・・ 我等のクーデターの時だ・・・！！』

影は1人機械的な声で叫ぶと、マシンリーの中に埋め込まれていたチップを抜き取り、その場を去って行った。

波立ちの無い畔

惑星ニューデイズの依頼を終えたギラム達はマイシップに乗り込み、彼等の住まいのあるスペースコロニー『クラッド6』へと戻ってきた。

その後別行動を取るアリンの後姿を見送ると、ギラムはフィルスターと共に自室へと戻ってきた。

ウィーン・・・

「ただいま。」

「お帰り主ー」

ドアのロックを解除し部屋へと入ると、主人の後ろを歩いていたフィルスターはそれに返事をするように部屋へと入った。

その後ベッドのある部屋へと向かったギラムの横をフィルスターは歩き、ベッドに腰かけた主人のためにとコーヒーを作っていた。

ベッドサイドには備え付けられたコーヒーメーカーがあり、いつもフィルスターはコーヒーをそこで作っている。

珈琲豆は買い置きで貯蓄されており、主人の今の好みを聞いたり体調具合を見て彼がチョイスしている。

「今日はどんな味の豆が良い？ 主。」

「ちょっと苦みのあるのが良いな。 ミルクは少しで頼むぜ。」

「OKー」

今日は依頼後と言う事もあり主人の今の飲みたい味をフィルスターは聞くと、それに見合う豆を取り出しミルにセットし挽き出した。

豆が出来上がるまでの間にフィルスターはミルクを取り出し温度を調整し、漂い出したコーヒー豆の香りを主人に当てながら豆を取り出し、機械にセットしお湯を注いだ。

すると自動的にコーヒー豆にお湯が注がれフィルターを通して下の容器にコーヒーが溜まり、あっという間に出来立てのコーヒーが主人の元へと向かった。

要望であるミルクはすでに入っており、コーヒーの表面にミルクで描かれた渦が浮いていた。

「ありがとさん、フィル。」

出来上がったばかりのコーヒーをギラムは受け取ると、静かにカップを口にした。

疲れた彼の身体に強い苦みのある珈琲が喉を通り、その後にミルクの優しい味わいが口の中をリセットする。

爽やかさとは違った味が彼の舌先を楽しませる、ギラムのお気に入りの一時だった。

「ん、やっぱ旨いな。 また豆も新しいのを買ってくるか。」

「そうだな。」

望んだとおりのコーヒーで楽しませてもらった様子で、ギラムは笑顔でそう言いフィルスターの頭を撫でた。

軽く動物に近い扱いにも感じるが、ギラムなりにフィルスターへの感謝のしるしだ。

元々言葉でどうこう言う事は彼は得意ではないため、相棒でもあるフィルスターにはこれでなんでもお礼として伝わる。

お金やいろいろな品でお礼をしても彼等には仕方がないと言う事から、ギラムが考えたお礼。

それが撫でる事であり、フィルスターも嬉しそうにその撫でを受けるのであった。

すると、

ピンポンッ

「ん、はい。」

マイルームにインターホンの呼び鈴が響き渡り、来客者が来た事を告げた。

音に対しギラムが返事をする目の前に電子盤の画面が浮かび上がり、誰が何を持ってやって来たのかが即座に表示された。

それに対し迎え入れるかどうかを問われ、彼は『YES』を選びフィルスターはやってきた荷物を受け取りにドアへと向かって行った。

しばらくするとベットに座る彼の元に荷物を持ったフィルスターが戻り、小包を彼へと手渡した。

彼の太腿の上に置かれた箱は大きくも小さい分類に入り、太腿から少しだけはみ出す程度の長さ。

奥行きも長さと同じくらいの大きさで、高さも同等の八面体の箱であった。

包みの上に張られた紙には『GRM(ガルム)社より・当選傭兵様へ』と書かれており、下には送り主であろう担当者名前が記載されていた。

正式な社から送られた事の証として紙には会社のロゴマークが印刷されており、正式な場所からの品である事が表示されていた。

「何が来たんだ、主一」

「GRM社からのボーナス品だな。前にも何回か来ただろ？」

「あー 『ツーヘッドラグナス』とか『ツイントルネード』とかか。」

「そう。今回は・・・射道具(シャドゥーグ)みたいだな。」

中身を確認しようとする主人にフィルスターは何が来たのかを問いかけると、大体中身は決まっている様子でギラムはやってきた箱の正体を言った。

依頼をこなす傭兵達への給与は所属する軍事会社が依頼先からの依頼金を渡すが、それ以外にも彼等に必要な道具がいろいろと存在する。

道中の危険な作業によって削られた体力を回復する薬品もあれば、身体に有害な状態異常を直すための治療薬。

他にもフィールドに備え付ける爆弾などがあるが、一番重要なのが『武器とユニット』だ。

試験的に造られた物も中には存在するが、会社の中で取り扱う高級な武器を働く傭兵達に出す事がしばしばある。

そのうちの内金は全て提供した社の負担であり、それを持ってさらに依頼に励んでほしいと言う意味も込められている。

しかしどの相手を倒したらどの品を貰えるかは決まっている様で定かでは無く、道中に出てきた『SEED』を倒した際も貰える事があるらしい。

そのあたりのシステムは、ギラムもイマイチ把握していない。

送られてくる箱の外見から傭兵達は『赤箱』と呼んでおり、中には普段使っている物とは違った武器が入っているとしてとても重宝されている。

中には赤箱を越えるレアリティが詰まる『虹箱』と呼ばれる伝説の箱も存在している事から、傭兵達の手にある事すら稀な希少な物も確認されている。

大抵それは名の売れた会社が作る事もあるのだが、中には未知の場所から送られてくる事もある。

しかしその姿を拝んだ傭兵達も少ないため、どんな外見で来るのかが分かっていない。

送り先が分かって居る事から、ある意味個人情報がダダ漏れと言えるのかもしれないが、実際には軍事会社が公開している情報を元に送られてくるのが基本。

決して悪用されたデータからは送られていないので、ご安心を。

「んー・・・でもさ主、コレいつものと違うんじゃないか？ いつも外見は『赤い』だろ？ コレ赤くないぞ。」

「そう言われるとそうだな・・・何を送りつけてきたんだ・・・？」

そんな彼等の元に今回届いたのは、時折送られてくる箱とは違った外見の箱だった。

普段は外から見ても分かるほどの赤い箱なのに対し、今日送られてきた箱は包みで丁寧に梱包された謎の箱。

梱包される事が基本ないため、これはとても意外な配慮である。

「丁寧に包装するっていう制度が、会社側で出来たのかもしれないな。 外見的に赤い箱って言うのは、あんまりイメージとして良くないのかもしれないぜ。」

「ふーん。」

謎の箱に不思議そうな目を向けていると、気になったフィルスターは捲れていた包装紙の一部を摘みながら剥がした。

するとそこから光が漏れ出し、七色の煌びやかな光が箱から放たれ出した。

「あ、主！ これ赤箱じゃねえ！！ 虹箱だ！！」

「えっ、虹箱！？」

彼等の元に送られてきたのは、今まで送られてきた箱とは桁違いの光りを放つ七色の箱。

その姿を目撃したフィルスターは慌てて主の背中へと隠れてしまい、定位置である肩の上から何が入っているのだろうかと恐れながらも興味津々な眼差しを向けていた。

驚いているのか楽しみなのか解らない相棒に苦笑した後、ギラムは残された包みを剥がし箱を開けた。

すると中からフィルスターの様な外見をした射道具が顔を出し、背中に着いた小さな羽を羽ばたかせながら彼等の前に浮き出した。

小さな手足と羽根が印象的な愛らしいマシナリーであり、外見はフィルスターそっくりだが色合いはウィンドベルと同じく青と白を基調とした色合いになっていた。

軽く周囲を飛びかう射道具を見て楽しんだ後、箱の中に残された説明書をギラムは手にした。

「えーっと・・・GRM社が誇る最新射道具『ディーラカーナ』だってさ。」

「へえー シャドウグなんだ・・・」

やってきたマシンリーは『ディーラカーナ』と呼ばれる援護射撃を行うマシンリーであり、しばらく周囲を飛んだ後ギラムの膝元に再び戻ってきた。

それを見た彼は軽く頭を撫でつつやって来たマシンリーを歓迎し、コーヒーマーカーの隣に置いた。

ベットサイドに置いといても違和感のない愛らしさであり、少しだけギラムとはミスマッチな気もしなくはない。

「何か主とは正反対の見た目だな。 可愛いし、ベルそっくり。」

「余計なお世話だ。 . . . とはいえ、中々出回る事が無いマシンリーみたいだし丁寧に扱わないとな。」

「だなぁ」

軽く茶々を入れられるもギラムは返事を返し、フィルスターを肩に乗せたまま立ち上がった。その後近くに置かれていた財布を手にし、食事を取りに出かけて行くのであった。

暗雲の波際

タッタッタッタッ・・・

ババババンッ・・・！

夜を迎え、新たな日がやって来た頃。

開店前のショッピングモールでは、1人のマシンリーがハンドガンを持ち走り回っていた。

足音と共に銃声も聞こえるが、辺りには人の気配はない。

「クッ・・・！ 何者なんだ！ ユーは！！」

走っていたのはラスベリーであり、敵に向かって叫びつつトリガーを引いた。

しかし弾丸は命中することなく影は避け、一気に相手との間合いを詰め囁いた。

「！」

【君達の、司令塔だ・・・】

「ノオオオーーーー！！！」

早朝の朝日が昇りかけたモール内に、彼の悲鳴が木霊した・・・

「・・・えっ？ ラスベリーが行方不明？」

日が昇り朝を迎えた住居区、昼食を終えたギラム達の元に一本の凶報が舞い込んだ。

髪の設定をしていた彼とドライヤーを持っていたフィルスターは、伝言を持ってきた相手に不思議そうな顔で返事を返した。

「そうなの！！ いつも早朝に出かける事なんてないからどうしたんだろうーって思っ

てたら、もうお昼になるのに帰ってこないのっ・・・！！ ベリリーが出て行

「っちゃったあああー！！」

「とにかく落ち着けて。メイド服もロクに整えられない程動揺してるのは、もう解ったから・・・」

シャワー後に襲撃をかけてきた彼女の恰好は、いつもと違い清潔感の無い乱れた格好でしかなかった。

何時もならばメイド服の上にエプロンを付けているのにも関わらず今日は付いておらず、ボタンを最後まで止める程のゆとりが無いのか胸元は中途半端な位置までしか止められていない。そのため、先ほどから出そうで出ない程の彼女の胸が、揺れながら見え隠れしている。年頃のギラムにとって、目に毒である。

「ええーんっ・・・」

「とはいえ、心配だな。ラスベリーが帰ってこない事って、今までにあったか？」

そんな彼女を落ち着かせようと椅子を置き、ギラムは泣いている彼女を座らせ問いかけた。するとメアンは持っていたタオルで目元を拭いつつ、震える声で言った。

「ぐすっ・・・ 長期の調達で、3, 4回・・・」

「じゃあそれじゃねーの。アイツの事だし、メモ位お前ん所に入ってんじゃねーか？」

「メモなあいもおおーんっ！！！」

彼女の返答にフィルスターは適当な仮説を立てるも、即効で彼女に怒られ再び泣かれてしまった。

おまけに泣きながら『彼の経緯がどうこう』だの『今までにそんな事は無かった』と言われる始末であり、先ほどよりもとても対応が面倒になってしまった。

「フィル、怒らせんな・・・ 不安定なんだからさ。」

「ああ、わりい。」

そんな彼の言動で怒る彼女を見て、ギラムはフィルスターに無暗に言わない方が良いと口止めするのであった。

「アリンの所には、何か連絡行ってるか？」

泣き止むどころか怒りだす彼女に罰としてフィルスターに世話を任すと、ギラムは通信を開き別室に居るアリンの元へと連絡を取った。

画面先に出る彼女は静かに顔を横に振り、皆の所に何も連絡が行っていない事を悟った。

『いいえ、ベルちゃんの所にも何も・・・ ラスベリーさんが不在にするなんて、少し不安です。 GRM社から発表されたニュースもありますし・・・』

「そうだな・・・」

不安げに話す彼女の話聞いてギラムは自室に備え付けられたテレビを付け、連日報道されているニュースを見た。

そこではハルが連日同じような内容で『パートナーマシンリーが居なくなってしまう』事を報道しており、事件の解決の目途も今の所立っていない事を発表していた。

最近ではGRM社トップの記者会見の様も公開されており、経営責任者であろう白髪の青年が眼鏡を何度かかけなおしつつ会見を行っている。

「そっちは、あの事件と関係ありそうな話。何か聞いてないか？」

報道されているテレビを一通り見終わると、ギラムはアリンに気がかりな点はないかと質問した。

すると彼女は、考える様に頬に手を付け考える素振りを見せた。

『特にそう言った件は・・・ あ、でもクラウチさんが【居なくなってしまったパートナーマシンリーを持つ傭兵の方々の話を、クレームとして送らないといけない】と言って、書類を幾多も作っているところは、以前お見かけしました。』

「クラウチも大変だな。まあとりあえず、ラスベリーの搜索願を俺達も出しておくか。仕事を増やすのは、気が引けるけどな。後でデスクで合流しよう。」

『かしこまりました。』

しばし考え込んだ彼女が話し出したのは、以前の依頼の報告をしにクラウチの元へと言った際の話だった。

依頼の報告をする前としている最中に他の傭兵達が上司の元へと訪れ、誰もが心配そうにクラウチに搜索願を出すよう頼んでいた。

それを聞いた彼は面倒そうに話を聞き入れ、1つ1つ書類に持ち主とマシンリーの名前を入力し相手側に送信する。

その上報告を1つ1つ送る際にも他の人達から話がひっきりなしに来るため、量が膨大になり圧縮しなければならない。

いろいろと作業が増えて行く事に、彼もお手上げ状態の様だ。

そんな彼の元で、皆と合流しようとギラムは提案したのち通信を切った。

「うし。 フィル、メアン。 クラウチの所に行って、ラズベリーの事を探してもらうよう頼んでみようぜ。」

「おう、了解主ー」

「うん・・・ ・・・ありがとう、ギラムう。」

「気にすんな。 ・・・とりあえず、服はちゃんと着てから行こうか。 胸、さっきから見えてるぞ。」

「あっ、ゴメン。」

その後合流する話を2人にも告げると、メアンは目を赤くしたままお礼を言った。

彼女のお礼に対し返事をしようとするも、先ほどから視界に入ってしまう彼女の身だしなみを指摘し、早めに直すよう言うのだった。

指摘された場所をメアンも見てボタンを締めると、いつもの彼女の顔になるのだった。

ウィーンッ

「クラウチ、ちょっといい」

「あの子がもう3日間も帰ってこないんです！！」

「可愛い俺の嫁が、朝から姿が見えねえんだ！！ なんとかしろ！！」

「落ち着けてお前等！ 上司のデスクで、クレームを言うんじゃねえ！」

『・・・』

その後身だしなみを完璧に整えたメアンと共に、ギラム達はリトルウィングの支部へと向かって行った。

扉を開けたと同時に上司の名前を言おうとした途端、やってきたのは他の傭兵達のクレームの嵐。

上司のデスクは完璧に囲まれており、長身のギラムでも相手の姿すら見えない状態だ。

「あっ、ギラムさん。」

「凄い数だな・・・ あれは全員、パートナーマシナリーが行方不明って連絡か？」

そんな彼等を見て、デスク側の扉の近くに立っていたアリンとウィンドベルが彼等の元へとやって来た。

話の内容に予測を付けつつギラムは質問すると、彼女は顔を立てに振った。

「はい。先ほどから皆さんのお話を聞いていますが、恐らくそうだと思います。」

「こんなにあの子達が行方不明って言ってる人が居るんだあ・・・ どうしよう、ギラムう。」

「何はともあれ、人波は中々引きそうにないな。 チェルシーの所に行って、俺達の分の書類くらい制作して行くか。」

「そうですね。」

自分と同じく相棒が家出してしまったのだろうと不安に思い、メアンは心配そうに彼等の様子を見ていた。

泣きながら訴える者も入れれば、怒りながら搜索作業を早めるようせかす者もいる。

それに対し1人1人ではなくまとめて対応するクラウチの姿は、とてもじゃないが書類を頼める状態ではなかった。

現状を見たギラムは彼の手伝いも出来て連絡が早く行く手段を検討し、反対側に位置するチェルシーのデスクへと向かって行った。

「チェルシー、ちょっといいか。」

「あらギラム、いらっしゃーい。 どうしたノ？」

向かった先に座っていたのは、アリンと同じくキャストの女性の受付嬢『チェルシー』クラウチとウルスラの代わりに仕事を行う事もしばしばある中、自分の店を経営し切り盛りする働き者だ。

見た目はキャバクラ嬢だが、仕事はいたって真面目に行っている。

「メアンのパートナーマシナリーが行方不明になっちまってな。 書類を代わりに書きたいんだが、ここでもできるか？」

「シャッチョサンの書く書類なら、ワタシもデータ持てるヨ。 何枚か書いたからネー」

「ああ、良かった。 一部貰えるか。」

「了解ヨー」

やって来た要件をギラムは伝えると、チェルシーは書類を取り出し代わりに何枚か書いている事を彼等に告げた。

予想していた通りの物が貰えると、ギラムは横にずれメアンに書く様指示した。

それを聞いたメアンはペンを取り出し、1つ1つの項目に必要な事項を記入して行った。

「・・・それにしても、被害は出まくってるんだな。」

「ガーディアンズでも出てるみたいヨ。 エミリアがルミアから聞いた一って教えてくれたからネ。」

「そうなのか？」

書類を記入するメアンを横目に、ギラムは再びクラウチのデスク周辺を見ながら呟いた。

彼の呟きにチェルシーは話をしつつメアンに記入する部分を軽く指さし、2人で仲良く記入していた。

彼女の言った事に問い直すと、チェルシーは静かに手招きし彼を近くへと移動させ、耳元でささやいた。

「一部の人の話では『パートナーマシナリー本人が、持ち場を離れて何処かに集まっている』って話みたいヨ。 ウルが得た情報ヨン。」

「集まっている・・・か。 了解、俺達も警戒しておくぜ。」

「お願いネー」

近くに呼んで話したのは『メアンに聞かれては悪いから』という配慮の様だ。

話を聞きギラムは返事をした後、記入を終えた彼女と共にその場を後にした。

荒れ出す大海

リトルウィング支社での『ラズベリー捜索願』を出し終え、ギラム達はひとまず集まろうと言う事になりマイルームへと向かっていた。

ギラムを先導にアリンとメアンが歩き、その後をフィルスターとウィンドベルが歩いている。

「ベリリー見つかると良いな。」

「ガーディアンズでも捜索活動が行われてるって言うし、すぐ見つかると思うぜ。」

心配ではあるものの明るく振る舞う事に決めた様子で、メアンは心配しつつ待ち遠しい様子でそう言った。

そんな彼女にギラムは励ます様に一言いうと、彼女も嬉しそうに返事をしつつアリンとギラムの手を取り「ありがとう」とお礼を言った。

「そしたら、しばらく1人で買い出しやお料理しないとなー 毒味はギラムにお願いするとしてー」

「さらっと毒味って言うんじゃねえよ・・・ 付き合ってるこっちの身にもなれよな。」

「はい、頑張りまーす。」

しかしお礼が毒味役と言う非道なのは相変わらずであり、心配する必要はないなとギラムは改めて思うのだった。

その後部屋で会議をしようと言うのだった。

「気楽な奴等。俺等なんて使いまわしなんだから、んなに一生懸命にならなくても良いだろうにさー」

「・・・」

「ん、ベル？」

そんな主人達を見ていたフィルスターはボヤキながら一言言いつつ、隣に居たウィンドベルを見た。

しかしいつの間にか歩いていた彼は遠い場所に立っており、入って来た扉を見つめる様に立っていた。

「どうした。」

「さっき、別のマイルームから僕達と同じナンバーの個体が歩いて行くのを見ました。 おそらく。」

「例のアレ、か。 どうする。」

見ていたのは別の部屋から出てくるマシンリーの姿であり、扉を見ていたのは丁度出て行った所だった様だ。

無断外出をするのはフィルスター以外には基本居ない事をウィンドベルも把握しているため、妙だと感じた事を彼に告げた。

すると先ほど提出した書類が彼等の脳裏に通り、恐らくそれではないかと言った。

「アリンさんに余計な心配をかけるのは申し訳ないですが、事件解決につながるのであれば僕達の手で片付けましょう。 主人に手間を取らせる様な事は、僕達はしてはいけません。」

「わかった、俺も行くぜ。 主に連絡を入れておけば、軽く繕ってはくれるだろ。」

2人で主人に迷惑をかけるわけには行かない、心配をかけるわけにも行かないと結論がつき、共に追ってみようと話がまとまった。

しかしもしもの事があると自分達も搜索対象になりかねないと思い、フィルスターは主人であるギラムの端末に一部データを送信し追跡出来るよう座標データも送信した。

これで大体の情報が分かれば、行先も現在地も主人の元に繋がると判断した様だ。

「すみません、フィル・・・」

「謝りは無しだ。 行くぜ、ベル。」

「はいっ」

その後前を歩く主人達を見送ると、2人は所持する武器を手にし走って行った。

するとすぐに追うべきパートナーマシンリーの1人『GH400シリーズ』のメイドタイプが転送器を使い何処かへ移動したのを彼等は見た。

すぐさま使われた転送器の転送先座標を割り出すと、2人も後を追って移動した。

転送器を起動させ向かった先は、華やかなモール街でもホテル街でもない虚数のVR空間。 辺りを照らしていた照明器具は最低限の明るさとなっており、どう考えても人気のない場所。

フィルスターとウィンドベルは互いに居場所を確認しコロニー内の座標を送信すると、熱源反応を頼りに追跡を開始した。

「こんな人気のない所に来るなんて、何をしてるんでしょう。」

静かに物音を立てぬ様普段から発生する足音を最小限にしながら歩きつつ、ウィンドベルは呟いた。

元々配属される身の彼等が主人の元を離れ、何かをするにしても人気のある場所が基本だ。それ以外の場所にやってくる事は稀であり、個人的な用でなければ来る事は無い。

「ありえるとしたら、本体の意識じゃなくて『操作』されてる。 だけどな。」

「操作・・・？ いったい誰が・・・」

「シッ。」

彼の問いかけにフィルスターは答えた後、何かを察し後方に居たウィンドベルに止まるよう手を出し静止した。

その後物陰に隠れ奥を覗くと、そこには周囲の明かりとは違った灯りを放つ集団の姿が居た。

通路を歩いて来た彼等の先には広い空間があり、そこにはネオンカラーで輝いている人工的な羽根があった。

その正体はパートナーマシナリーが装着している『シールドライン』であり、緑色が目立つ中一部は別の色で発光している。

簡単に数えただけでも、数十体はその場にいるだろう。

「さっきの人・・・ですよ。」

「行方不明になってたナンバーと大体一致するな。 こんな所に来てたのか。」

「・・・あっ、フィル。 中央に、別の人が居ます。」

「？」

物陰に隠れ様子を伺いつつ、ウィンドベルは追って来たメイドタイプがその場にいるのを確認した。

他にも『スイムタイプ、マジシャンタイプ、ナースタイプ』と、比較的傭兵達が好んで使用しているマシナリー達の姿が見え、中には珍しい個体の姿も見えた。

そんなマシナリー達を見ていると、不意にウィンドベルは彼等の中心に別の存在が居る事を目撃し、フィルスターに告げた。

その場に居たのは黒いローブを纏った陰であり、遠くからでは人なのか機械なのかも解らない。

【○×◆?◎・・・ !#○■。】

影は独特の言語と思われる声で集まったマシンリー達に何かを告げている様子で、フィルスター達の言語解読では判断出来ない話し方をしていた。

いったい何を話しているのだろうと思い様子を見ていた、その時だ。

《侵入者発見！！ 侵入者発見！！》

「！！」

「なっ、やべっ！！」

彼等の背後に遅れてやって来たのであろうレトロタイプの個体が彼等を見つけ、普段の言語よりも機械的な音声で周囲に発した。

それを聞いた2人は慌ててその場を離れ声を発する相手をなぎ倒し、元来た道を大急ぎで戻って行った。

別個体が居た事を知った集団達も動き出した様子で、彼等の後から幾多の足音が聞こえてくる。

「マズイって、これじゃ俺等もラスベリーの二の舞になっちまう！！」

「まだアリンさん達に正確な情報も渡してないのに、僕達が捕まったら・・・！！」

「主いいいー！！！！」

《素体ニ別概念有。 記憶ヲ排除セヨ、記憶ヲ排除セヨ。》

「邪魔だああ！！ 退けえええ！！！！」

「ラ・フォイエツ！！」

持っていた武器で前方に立ちはだかろうとするマシンリー達を迎撃しつつ、2人は転送器が無いかと一生懸命に探した。

しかし元来た場所にその痕跡は残っていないどころか、どんどん彼等の周りに熱源反応がやってくるのを彼等は観測していた。

なるべく追手の少ない路地へと入ると、何時しか彼等は道の無い観測路へと迷い込んでしまっていた。

「クッ、行き止まりかよ・・・！！」

「フィル！！」

「！！」

慌てた2人の来た道にはすでに操られているであろうマシンリー達が立ちはだかり、後から中心であろう影が彼等が開けた道を通ってやって来た。

その姿は人間と同等だが少し小さな体系だが、肩幅があり怪しい目の色を彼等に見せていた。

【どうやらお前等は、我々の観測領域に入り込んで情報を漏洩するつもりらしいな。 GH500・ウィンドベル、GH501・フィルスター】

「・・・ お前、何者だ！ ラスベリーをどうした！！」

【知ってどうする。 ココは観測領域を剥奪した過去の通路、回線はとっくに遮断しているぞ。】

完全に逃げ道を失った彼等に影は話しかけると、フィルスターは個体名を認識されるもその場に居るであろう友人の名前を言った。

しかし相手は知った所で外部に情報を流す事は出来ない事を改めて言うと、フィルスターはライフを構え知ってもなお抵抗する意志を見せた。

「ラスベリーさんを、メアンさんの元に送り届けるだけです。 アリンさんにもフィルにも、手出しはさせない！！」

【フッ、話し合う余地も無いか。 ならば・・・お前等の意識回路を、いただくまでだ！！】

バッ！

「チッ！」

そんな彼等の思考回路を奪おうと影は合図をするように手を前に出すと、後方に待機していたマシンリー達が一斉に彼等に向かって襲撃をかけた。

手にはそれぞれが普段使用している武器を手にしており、操られていることもあり戦闘力は通常以上であると認識した。

「させない！！ 燃え盛れ炎よ！！」

やってくる敵の波を見たウィンドベルはロッドを構えテクニックを演唱し、自身を中心に炎の波を発生させた。

波に飲まれたマシナリー達は吹き飛ばされ後方に居た他のマシナリー達の上に転落し、一時的ではあるが隙が生まれた。

それを見かねたフィルスターはライフルを上空に向けチャージショットを放ち、陰に向けて攻撃を仕掛けた。

しかし、

【甘いな。】

「何っ！！」

攻撃を一瞥し影はそう言うと、自らの身体に弾丸が直撃しても微動だにせずその場に立っていた。

代わりに影を覆っていた黒い布地が弾丸によって裂かれ宙に舞うと、影の素顔が彼等の前に現れた。

「シ、シノワビート・・・！！ マシナリーがマシナリーを管理する気か！」

【その程度の思考回路しか持たぬ貴様らに、理由を話す事などない。 頂くぞ！！】

「ッ！」

影の正体は彼等と同じマシナリーの分類に入る『シノワビート』だった。

白色のボディと藍色の肩パーツが印象的な機械であり、人型に近い形をしているもキャストとしては分類されない。

相手は問われた質問に答える事はせず、腕を構え彼等に特攻を仕掛けた。

その時、

「フィル、隠れて！！」

「えっ！」

「いっけええええええ！ SUVウェポン 全力展開ーッ！」

後方に居たフィルスターに自分の背中に隠れるよう指示した直後、ウィンドベルは両手を上空に向け支援武装機械を呼び出した。

すると彼等の前に周囲を一掃するレーザー砲が降臨し、彼は機械を操作し相手をなぎ倒し出した。

【クッ・・・！】

「これに捕まって！！ 通信回路が遮断されていても、これなら外部へ戻れます！！」

「ベル、お前も！」

形勢逆転とばかりにレーザーを受けたマシンリー達は外へと吹き飛ばされる中、ベルは攻撃が止む前にと彼に呼び出した機械の上に乗るよう指示した。

彼の声を聞いたフィルスターは急いで機械の背中に乗ると、ウィンドベルも乗るよう手を伸ばした。

しかし彼はハンドルを握ったまま顔を横に振り、彼に笑顔を見せつつ言った。

「お願いします。 アリンさんを、僕達の主人を・・・護って下さい！！」

「ベル！！」

【させるかああ！！】

そんな彼等の脱出する隙を見て、敵は塀を駆け上りフィルスター達に無数の針を発射した。

しかし針が彼等に命中する前にとウィンドベルは呼び出した武装機械を再び転送しかえし、フィルスターを転送手段のある場所へと送り返した。

異次元空間へと送られるフィルスターは前を見ると、そこには相手の攻撃を自らの身体に受けたウィンドベルの姿が映っていた。

「フィル・・・ アリン・・・さん・・・」

「ベルーー！！！」

パシュンッ！

針を身体中に当てられたウィンドベルはその場に倒れると、敵は彼の前へと降り立ち残っていたマシンリー達に負傷した皆を連れるよう指示した。

指示を受けたダンサータイプとウェイトレスタイプ、ボーイタイプ達は丁寧に彼等を担ぎ上げ、そのまま何処かへと向けて運んで行ってしまった。

その場を離れて行ったマシンリー達を見送ると、シノワビートは当たりを見渡し跡形も無く一体を逃がした事を悟った。

【小癪な真似を。・・・だが。】

目を光らせながらウィンドベルの行動に苛立つも、一点を見つつハズレではなかった事を敵は悟った。

そこには中途半端に折れた針の姿があり、空間干渉によって損壊した物である事が分かった。

【直に奴も、我等の手に堕ちる。 その時が、襲撃の時だ・・・！】

使用した針を根こそぎ消し飛ばすと、敵はその場を後にしマシンナー達の後が続いて何処かへと消えてしまった。

深海へ墮ちる相棒

ウィンドベルの呼び出した支援武装機械の転送回路を利用し、現場を脱出したフィルスター
その後自身の知るルートを使用しリトルウィングへと戻ると、すぐさま自分が管理を任されている
ギラムのマイルームへと向かって行った。

「早く・・伝えねえと・・・ やべえって、コレ・・・」

しかしその頃には最初の元気は無く、徐々に蝕まれているであろう思考回路を一生懸命に自意識
に向けていた。

放たれた刺が一本だけ彼の足先に命中してしまっていた事が今の状態であり、それ以上受けてい
れば今の自分は個々には居ないだろうと彼も思っていた。

それだけ強力な上書き変換を行われていると言う事であり、庇ってくれたウィンドベルのためにも
と彼は扉のロックを解除し、中に転がる様に入室した。

「あ、るじ・・・！！ 主い・・！！」

体制を崩しつつも部屋へと入ると、部屋に居るであろう主人にフィルスターは力を振り絞って声
を放った。

しかし奥からは返事が返ってくる事は無く、奥のシャワー室からも物音がしなかった。

「クッ・・そっ あのメイド・・だな・・・ ・・・っ、怒ってる場合じゃねえんだっつ・
・の。」

一番の助けが不在の理由に予測が付きフィルスターは苛立つも、そのまま意識を失うわけには行
かないと首を何度も横に振った。

その後意識が少しだけ戻ってくるのを確認すると、壁に手を付け壁伝いにビジフォンの元へと
向かって行った。

そして電源を入れ、両手でしがみつ়く様に棚の上に身体を乗せた。

「早く・起動・・・しろっ！！」

《・・・》

「・・・？」

しかし中々起動画面が出ず意識がもうろうとする中、フィルスターは近くに熱源反応がある事を感じた。

頑張って首を横へと向けると、そこには先日新たにやって来た『ディーラカーナ』の姿があった。

たまたま電源が入っていた様子で彼の事を心配そうに見ており、言語機能は無いものの目で「大丈夫か」と訴えていた。

「・・・頼む・・・主に・・・俺達の・・・居場所を・・・！ 教えて・・・やって・・・くれっ！！！」
《・・・》

最後のチャンスだろうと思ったのか、フィルスターは意識が残っているうちにと隔離しておいたデータチップをディーラカーナに啜えさせた。

彼の頼みを聞きいれたのかディーラカーナは目を数回点滅させると、フィルスターは安堵した様子で笑顔を見せその場に崩れ落ちた。

しばらくそのまま動かない彼をディーラカーナを見ていると、不意に起動音と共にフィルスターが立ち上がったのを見た。

しかしいつもの彼の目の色とは違い、赤い目をし言葉を呟いていた。

【マシナリーに・・・人権を・・・ 主人に・・・制裁を・・・】
《・・・》

言葉を呟きながらフィルスターは歩きだし、そのまま部屋を後にし出かけて行ってしまった。彼の後姿を見送ると、ディーラカーナはチップを加えたままベットサイドの上へと降り立りのだった。

「・・・ハア、疲れた・・・ 一方に上達する様子がねえんだよな・・・アイツ。」

自室を離れ、味覚を消し飛ばす晩餐会へと出席していたギラムは、疲れた足取りで部屋へと向かっていた。

半ば断るも強引に食わされてしまう事もあり本日も食していたが、今回はラズベリーが居ないと言う事もあり彼なりに心配している事もあったため、自ら出席していた。

おかげで味覚の全てを一時的に吹き飛ばされ『マズイ』の一言を言わせるほどの味を食わされ

たが、今回は仕方ないと彼も諦めていた様だ。

「あれ、フィル・・・？」

そんな疲れた表情で部屋へと向かっている途中、彼の目の前に緑色の鮮やかな機械的なボディが目に映った。

顔を上げ相手が自分の相棒である事を認識するも、フィルスターは気付いていない様子でその場を離れ住居区の扉を抜けて行ってしまった。

『出かけたのか。 アイツにしては珍しいな、俺が戻る前に出かけるなんて。』

しかし彼の外出は比較的珍しい事では無かった事もあり、ギラムは左程気にしない様子で自室へと入って行った。

ご丁寧に鍵だけは締めてある事もあり、なおさら不審に思うことなく入室し、鍵を閉めた。

「ただいま。」

パタパタパタ・・・

《・・・》

部屋へと入り一声かけると、ベツルルームからディーラカーナが静かに飛び出し彼の前へとやって来た。

特にプログラムした覚えはないものの出迎えてくれたのだろうと思い、ギラムは軽く笑顔を見せつつ頭を撫でた。

「ただいま、ディーラカーナ。・・・なんだ？ その口に啜えてるチップは。」

その後彼の口に黄色いチップが啜えられているのを見て、ギラムは何かと問いかけた。

しかし特に返事をする事無く相手は静かに首を振る様に身体を動かしており、取って欲しいと言うかのように手を欲していた。

《・・・》

「俺に・・・か？」

しばし相手の動きを見た後彼は静かに手を出すと、ディーラカーナはチップを離し彼の手の上へと落とした。

それを見たギラムはチップを持ったままビジフォンの元へと向かい、起動画面が浮かんだ機械の中にデータを落とした。

するとフォルダ名は『FierSter(フィルスター)』となっており、先ほど出かけて行った彼のデータチップである事を知った。

「フィルのデータチップ・・・？ アイツ、まさか！！」

《・・・》

「・・・　　・・・そっか。　　アイツ、自分の身を犠牲にしてでも俺達に居場所を伝えに来てくれたのか・・・」

持ち主が誰であるのを知り彼はディーラカーナを見るも、相手は何も言わず静かにギラムの周りを飛んでいた。

言語機能が無いだけでここまで伝える事に時間が掛かるのかとギラムは思うと、彼を静かに手に取りビジフォンの隣に置いた。

その後展開されたフォルダを開き、1つの文章データを開いた。

そこには、こう書かれていた。

『主へ。

これを見た後に、もし俺の後姿を見かけていたのであれば、主は何も悪く思わないで欲しい。

俺も俺自身の意識ではどうする事も出来ずに動いていて、ラスベリーとウィンドベルも自分の意識で主達の元を離れたんじゃない。

それだけは解って欲しい。　主なら、きっと俺の言う事を信じてくれると思うから、このデータを残す。

残せる限りの座標データと、相手の情報とおそらくの目的をデータとして残しておく。

主、俺達を助けて欲しい。　敵の目的は何なのかは解らないけれど、主ならきっと出来ると思う。

あの時のナヴァルの時みたいに、主の前から俺は消えたくない。　この考えだけは事実だから、そう伝えたい。

主。　　独りだって、思わないでくれよな。

主の最愛の相棒。　　フィルスター』

「・・・」

記されていたのは意識があった時の彼からのメッセージであり、残りのデータが何なのかを記すメモでもあった。

書かれていた手紙を読み潤む目を拭いつつ彼は手紙を読み終えると、一度顔を天井へと向け涙が引くのを待つかのように目を瞑っていた。

その後流れて来るであろう涙が目の奥へと引っ込むと、彼は再び顔をおろし画面を見た。

『お前って、本当に主人思いだな・・・フィル。　こんな俺なんかに身体を張って、死ぬかもしれないって言うのに手紙まで残してさ。　・・・泣けてくるぜ。』

《・・・》

すると横にはディーラカーナが翼を動かした状態で彼を見ており、ちょっとだけ元気になったのかという様な顔を向けていた。

心配してくれているのだろうと思いギラムは彼の頭を静かに撫でると、すぐさま相棒の残してくれたデータを自分の端末へと送り、アリン達に回線を繋いだ。

「皆、フィル達の居場所を特定した。　これらから迎えに行く、すぐに集まってくれ。」

その後言えるだけの事を彼は言うと、席を立ち倉庫から可能な限りの武装を手にし、準備をするのだった。

岩盤へ乗り上げた青年達

フィルスターの残して行ったデータを頼りに、ギラム達は可能な手段を使いどう奪還するかを検討していた。

彼等の向かって行った座標は惑星パルムを指しており、GRM社が以前まで使用していた『マシナリー生産工場』だと言う事を突き止めた。

さらにクラッド6内にも彼等が侵入した痕跡がある事から、上司達に聞き込みをしどのようなルートを使ってやって来たのか。

その他もろもろを短時間のうちに集め上げ、再び彼の部屋に3人が集まっていた。

「クラウチからの話だと、奴らは『業者への運搬』と理由を付けてココへ潜入し個体を集めていたらしい。今はその場所に居た痕跡すら残っていないが、向かったのは今フィル達が居ると思うココだ。」

自分が使用するマイルームの一角に置かれたテーブルを囲み、ギラムは電子盤をアリンとメアンに見せつつ大体の流れを説明していた。

彼等の行動によってクラッド6内に居たパートナーマシナリー達のほぼ8割が回収され、傭兵達のクレームとなってクラウチの所に集まっている。

一部の被害が出ていない個体達は、主人の配慮によってそばを離れなかった事が理由だ。

「ベルちゃんとフィルちゃんも、そこに居るんですね。」

「『個体の意識を制御して、自らの思うがままに操作する』 マシナリー特有の回路が、上手く利用された結果だな。」

「早くベリリー達を助けてあげないとっ！ ギラム！！」

「ああ、わかってる。・・・だが、現場に強襲をかけると場所が場所だ。大事になりかねない。」

話を聞き終え、アリンは相棒であるウィンドベルの所在を確かめた。

彼女もまた帰ってこない彼を心配し待っていたが、ギラムからの連絡を聞いてからは落ち込む事無く前向きに事を収めようと努力していた。

以前の『ナヴァル』の時とは違い、泣いてばかりいては仕方ないと彼女自身も思っている様だ。結果的に事件は『パートナーマシナリー』の思考回路を利用した犯行であり、それに対する対抗策も彼等は検討していた。

半ば気持ちが先走るメアンを留めるのも、今のギラムの大事な仕事だ。

隙を見せれば何をするか解らない上、特に彼女に対しては気を付けなければならない。
1人でガイノゼロスを一刀両断してしまうほどの大打撃は、現場に痕跡を残しかねない。

「作戦はシンプルだが、なるべく足を残さない手法で行きたい。 一時的なマシナリーの強制停止は俺とアリンで行うから、メアンは大破させない程度に相手を抑えてくれ。」

「はい。」

「状況に応じて、俺も足止めに入る。 アリンは行動しながら、フィル達の居場所を探ってくれ。 場所は大手の工場、中々広いと思うが頼むぜ。」

「わかりました。」

大体の作戦を確認し終わると、ギラムは電子盤を消しクラウチの元へと回線を繋げた。

その後何時何処へ出るという出発許可を貰うと同時に、行動に対する経緯と上司へのメリットを告げた。

主なメリットと言えば、社員である傭兵達の『クレーム処理の大幅な削減』だ。
マシナリー本体が見つかり回収出来さえすれば、文句を言う事も伝える必要もなくなる。
と言った、簡単なものだ。

【あんまり無茶すんじゃねえぞ。 工場の地図はさっき送ったから、それを参考にしてくれ。】

「了解。 助かるぜ、クラウチ。」

【良いつて事よ。 クレームの処理が無くなれば、面倒な手間も省けるってもんだからな。】

しかし上司は迷うことなく発進の許可を出し、餞別と言わんばかりに行先の工場内の見取り図も送付してくれていた。

元々ギラムの行動そのものが間違っていた事があまりない事と、上司も一部同伴した前例もあるため、疑いは無いのかもしれない。

その分面倒な事柄を任される事もたびたびあるが、ギラムは気にせずお礼を告げ回線を閉じた。

「うし、行こう。 移動しながらデータの確認をしてくれ。」

「ベルちゃん達を、助けましょう。」

「ベリリー、待っててねー！」

会議中に使用していた道具を全て片づけると、3人はマイシップ乗り場へと向かい惑星パルムへと早々に飛び立って行った。

惑星パルムに拠点を構える『G R M社本社』では、主に武器の制作から『キャスト・マシンリー』の生産を行っている。

基本的に貴社以外で創られたキャストとマシンリーは法的に認められておらず、事実上の権限と力を握っている。

工場ではデータを元にして造られたマシンリー達が幾多も居り、状況に応じて現場へと派遣される形となっている。

生産工場が移転したのは幾分前の事であり、制御する人員が減った事により隙が生まれた様だ。

「あそこが、フィル達の居るポイントか。」

目的地周辺に降り立った彼等は工場を見下ろせる場へと赴き、双眼鏡で現場を覗いていた。

外装は未だに使われていると思われる風貌だが、大規模な生産は別の工場で行っているため工場への出入りが激しい点がとても妙だ。

その上入ってくるのはどれもコンテナばかりであり、人の姿がない。

「熱源反応が今は一部で纏まっていますが、まだ起動していないマシンリー達もたくさん居ると思います。 予想以上に数は多いと見ても、間違いは無いかと。」

「何時もみたいに派手にやらないのー？ ギラムう。」

一通りの周りの状況を見た後、アリンは自身に内蔵されたレンズを使用し活動するマシンリー達の数を測定した。

結果どの階層にも熱源反応が集団である事が判明し、現場も現場と言う事もあり稼働していないマシンリーも居るだろうと予測した。

そんな彼女の報告を聞きながら、メアンは面倒な計画を立てずに特攻を仕掛けた方が良いのではないかと言った。

「派手にやってカメラに残って視ろ。 俺等は半ば不法侵入みたいなもんなんだから、墮ちるぞ。」

「え——」

しかしそんな事をすれば、未だに権限の残る工場に『不法侵入』したことになりお縄確定だ。

上司に出る理由や現場を告げたとはいえ、責任を取るのは基本的に上位の立ち位置に居るギラム

本人だ。

彼と行動を共にしていたとなれば、アリンとメアンも同罪である。

「まあでも、時期に行動しても良い状況にはなると思うぜ。それが確定したら、タイムリミットは大体で『30分』って所だな。」

「リミットって？」

「許可が下りて派手に行動すれば、外部にも何かしらの情報が出る。大体早かった事を想定すれば、それくらいでマスコミが来るだろうって予測だ。一時的に止めてはくれるだろうが、如何せん限界がある。」

「あ、そうなんだ。」

とはいえ、彼なりに突入した際の事後処理の面での保険もかけていた。

以前顔を合わせる事があった事もあり、相手と接触していたのが今回の相手であり許可を出す相手。

しかしそれが降りるまではしばらく時間が掛かると言う事が、初盤は地味で居るように彼が念を押す理由だ。

許可の前にバレてしまえば、意味が無いのだ。

「連絡が来たら言うから、それまでは地味にな。壊すのも厳禁だ。」

「はい。」

「うし、じゃあ行くぜ！」

その後使用していた双眼鏡を消し武器を手にする、3人は行動を開始し工場側面から中へと潜入しに向かって行った。

自分達の相棒が待つ、工場の中へ。

深海への強襲者

惑星パルム内に存在する生産工場へと到着し、ギラム達は入口のマシナリーに気を配りつつ中へと潜入した。

外装の白さとは違い、中は薄い空色のパイプと風を遮断する断熱材で広くも爽快感のある空間が広がっていた。

中では幾多のコンベアーと装置が数を成して置かれており、離れた場所にあるコンピュータにはマシナリーの図案が浮かんでいた。

しかしその場に人の姿は無く、何処も機械的な音しかしていない。

「・・・この場の人員を減らしてマシナリーだけで行っているって言うのは、本当だったんだな。制御室に人が居るとして、問題はカメラだな。」

「11時と7時、それと3時の上方にカメラが数台。階層を移動する際のパイプには、認証システムがあります。」

「その辺をどうやって突破するか、だな・・・ 大本の所在は、掴めそうか？」

「まだ少しかかります。少々お待ちを。」

その場で稼働するマシナリー達を見て人の目視による発見がない事を悟ると、ギラムは周囲に設置されているカメラの位置を気にした。

彼の発言にアリンは情報を提供しつつ死角となる場所へと誘導し、一時その場で作戦を考える事を推奨した。

上層部へと移動する際に使われる装置には認証システムがあり、階段にもカメラがある事から下手に動く事は出来ない。

一通りの現場の状況を掴み終わると、アリンはフィルスター達の居場所とその場へと向かうためのルートを確認していた。

結果が出るまでは、もう少し時間がかかりそうだ。

「・・・むう、暇一」

「もうちょっとだ。」

そんな彼女の作業と動かない事もあってか、もう1人の同行者は暇を持て余していた。

アリンと違い周囲をサーチする能力も無く、かといってギラムの様に作戦を考えるのも得意ではない。

メアンには非常に退屈な時間が今であり、今か今かと作戦開始を待っていた。

「・・・ギラムう」

「まだだ。」

「・・・ ねえー」

「あと少し。」

「待てないー——・・・！！」

「静かにしろっ・・・！！」

次第に暇を潰すかのように隣に居るギラムにまだかまだかと催促をし、適当な相槌を返される始末だ。

小声ではあるもののやり取りが徐々に大きくなり、終いには頭を押さえられ顔を出すなど怒られる。

そんな自由への束縛もあってか、彼女は頬を膨らませ怒っていた。

しかし徐々に耐え切れなくなった様子で、とうとう彼女は体制を上げ身体を起こし叫んでしまった。

「むうおお——っ！ ベリリー何処おおお——！！！！」

「あっ、馬鹿っ！！」

《ビーッ！ ビーッ！ ビーッ！！》

「馬鹿野郎、言わんこっちゃない！！！」

彼女の声を受けて静寂な場が乱された事に反応してか、周囲に付いていた警報装置から音が流れ出した。

慌てたギラムはアリンに移動すると告げその場を立ち上がり、やってくるであろうマシンリーへの迎撃態勢を取り出した。

「前方と右通路先から、熱源来ます！」

「ったく、こうなりゃ足止めだ。 ほら、暇が無くなったんだから仕事しろ！」

警報装置が鳴り出した場所から移動ししばらくして、周囲からやってくる敵の反応を2人に告げた。

それを聞いたギラムは怒りつつも暇だ暇だと連呼していたメイドに仕事をするよう命じた。

「はい、待ってましたーっ♪」

「何で嬉しそうなんだよっ・・・！！」

それを聞いたメアンはフライパンを取り出し楽しそうに返事をし、言われた通りとばかりに前方からのマシナリーを全力で足止めしに向かって行った。

半ば楽しそうな彼女に再び彼は怒るも、そんな場合では無いと頭を切り替え持ってきていたスタントラップを取り出し、右から来る敵の通る場を予測しアリンを後ろへと下げ設置し起爆した。すると彼の読み通りトラップに次々にマシナリーが突っ込み、一時停止する機械達が次々に山となって通路を塞ぎだした。

バツ！

「うし、後は・・・！ 氷石雪崩封じ！」

後々動かないようにとギラムは仕掛けた爆弾が終わると同時にロッドを構えテクニクを発動し、通路全体が凍る様に氷を落とした。

大きな氷の塊が次々とマシナリー達の前へと降り注ぎ、完全に右からの通路の襲来を阻害した。簡単ではあるが敵の数が大幅に減ったのを確認すると、彼は武器をそのままに前方で戦うメアンの元へと向かい隣でテクニクを唱えた。

「凍りつけっ！」

ロッドの先端から幾多の氷を生成し、地面を這うように冷気がマシナリー達をすり抜けた。

すると氷の這った工場内の通路は完全に凍りつき、即席のアイスリンクが完成した。

氷の上を歩く様に設計されていなかったマシナリー達は次々に足を滑らせ、中にはそのまま駒の様にクルクルと回りながら壁へと激突する者も現れた。

隣でメアンが賞賛する様に手を叩く中、3人は近くの階段へと向かいそのまま二階へと向かって行った。

すると、

ピピピッピピピッ！

「？・・・アリン、メアン！ 許可が下りた、盛大にやるぜ！！」

ギラムの腕に備え付けていた端末がメールの着信音を告げ、送られてきた手紙を軽く読んだ。すると彼等が待っていた内容がそこには書かれており、派手にやる代わりにタイムリミットの発生する戦いが開始された。

「待ってましたああー！」

「行きます！」

半ば制御していたのかは解らないメアンを除き、2人も武器を持ち替え本気で行ける体制で戦闘へと望んで行った。

その後も道中からは操られていると思われるマシナリー達の大群が大波の様に押し寄せ、それぞれが戦闘をする中他の方向から敵が来ない様にと3人は協力しながら相手を倒し出した。

「は一っ、ご賞味下さいませーっ！ メインディッシュー皿、でっきあっがりいっ♪」

やってくる大群を目にし、メアンはフライパンを使い華麗に一体一体を上空へと打ち上げ、遠くへ追いやる様に蹴り飛ばした。

時々やってくる銃弾にはシールドで対応し、殴りと蹴りを上手に組み入れ迎撃していた。

「退かしますっ・・・！ 止まって下さい！」

変わってアリンはと言うと、テクニクを演唱しまとめて相手を止める様心がけていた。

接近される事だけは避けながら狙った場所へと雷を落とし、時々杖の先端からも放電し相手を止めていた。

華麗かつ優雅に舞う様に、彼女は綺麗にあしらって行く。

しかし、

《侵入者は排除する・・・！》

「！」

完璧に防衛する事はまだまだ難しく、一部撃ち漏らしたマシナリーからの襲撃には対応出来ない。

杖を構えたままの状態と言う事もありガードも出来ないと思われた、その瞬間。

「おっと、そうはさせないぜ！！」

ガスンッ！

彼女とマシナリーの間に1人の影が即座に入り込み、手にした武器で打ち払われた。飛ばされた拍子に他のマシナリーを巻き込むように敵は墜落し、再び瓦礫の山となって彼等の足を塞ぐ。

「ギラムさん、助かりました。」

彼女の前に割り込んだのはギラムであり、普段使っているツインダガーでは無く大剣を手にしその場に立っていた。白くも光り輝く剣を肩に担ぎつつ彼は彼女の無事を聞くと、大丈夫である事を確認したのち再び前を見た。

「まだまだ休めそうには無いからな。 援護頼むぜ！」

「かしこまりました！」

前衛慣れしていない彼女のためにと彼は言うと、ソードを構え敵の集団に特攻して行った。許可が下りたと同時に派手に彼も行動し、大剣で薙ぎ払い刀身を当て動きを止めた相手を蹴り飛ばす。メアンよりも蹴った際の飛距離と威力が大きい事もあってか、マシナリーは綺麗に床と水平になるぐらいに勢いよく飛んでいく。素晴らしい脚力による一撃が、マシナリー達にも手痛いと思われる。

その後も『波が引くと走り、やってくると迎撃し』を繰り返すフィルスター達の居場所を探していく。道中目に入った部屋をチェックする様に一瞥するも、中々彼等の姿は見つからない。すると、

「ベルちゃん達の居場所が特定出来ました。 この先です！」

許可が下り10分経つか経たないかのタイミングで、アリンは通路を指さしながらこの先に居ると言った。

それを聞いたギラムとメアンは顔を見合わせ頷くと、彼女が先頭に立ち両手にフォークを構え勢いよく振り払った。

その隙にと彼は再びロッドを手にし、テクニクを演唱し放った。

「銀食器いい、ホームラァアアアーンッ！！」

「突き出し岩盤、乱発！！」

ガスンガスンガスンッ！

フォークに薙ぎ払われたマシンナー達は、再び後方に居たマシンナーを巻き込み山となった。その隙を逃すまいとギラムは壁一面から岩盤を突き出させ、氷よりも頑丈な道封じを行った。保険とばかりに何度か別の岩も張ったため、しばらくやってくる事は無いだろう。

「よっしゃああ！ メアン、遅れるなよ！」

「えっ、ちょっ！ ギラムう、待ってー！」

その後フィルスター達の居場所をめざし、3人は上層階に位置する部屋へと向かって走って行った。

相棒と青年達

工場内に潜入し迎撃態勢を取るマシンリー達の猛威を掻い潜り、ギラム達は目的の部屋の前へと到着した。

丁度工場へと入って来た際に使用した入口の真上に当たるのが今彼等が居る場所であり、そこには『管制室』と書かれていた。

中に人が居るかと思いギラムは静かにドアを開けるも、そこには人の気配は無かった。

「・・・あれ、誰も居ない・・・？」

「確かギラムの話だと、ここら辺に人が居るんじゃないかって。」

辺りは暗く照明が落ちている部屋は光が薄く、部屋の中に置かれていた電子盤からの淡い光のみの状態。

彼等の視界に捕えられる光の量が少ない事もあり、あまりにも人が居るとは思えない場所であった。

すると、

【来たか。我々を傀儡(くぐつ)人形の様に扱う者達。】

「！ 誰か居るのか。」

入口に留まっていた彼等の耳に機械的な声が聞こえ、誰も居ないと思われていた空間に音が響き渡った。

声を聞いた3人は武器を構え、光の差し込む扉が閉まらない様抑えつつギラムは当たりを見渡した。

すると、部屋の奥から怪しい眼光の様な光を放つマシンリーの姿が浮かんで来た。

【あまりもてなしをするほど、貴様等は上等な生物とは思っていないその無礼だけは詫びよう。

しかし我々の歓迎はありがたく受け取ってもらえたみたいだな。】

「歓迎？ あんなのが歓迎だなんて、君オカシイよ！ 歓迎って言うのは、もっとクラッカーとかを使って盛大に送るモノなんだから。武器で特攻欠けて来るなんて失礼だよー！」

眼光の光の強弱を見せつつ影は喋り続け、マシンリー達の歓迎を掻い潜りここまでやって来た事を評価していた。

しかし行動そのものを相手は『歓迎』と言っていた事が、メアンからしたら意に染まない様子で訂正する様求めた。

だが彼女の意見に耳を貸す様子も無く、影は暗い部屋で呆れた様子で右手を軽く振っていた。

【お転婆メイドには中々不評の様だが、まあいい。　ココまで来れた事を評価して、今度はこいつ等と遊んでもらおうか。】

ガコンッ！

「ッ！　・・・！！　フィル！！」

彼女の意見を軽く流しつつ影は言う、指を鳴らす様に金属同士を擦り合わせた。すると部屋の隅から大きな物音と共に照明が照らされ、3人は不意に増えた光に眩惑されつつも前を見た。

そこには部屋の中央、天井からロープで縛られたフィルスター達の姿があり、電源が落とされているのか目は閉じ3体とも前かがみの体制で捕えられていた。

彼等の姿を見たアリン達も慌てて相方の名前を呼ぶも、彼等は身動き一つする事が無かった。光が増えた事もあり影にも色が戻り、彼等の前に対峙していたのは『シノワビート』である事を3人は目視した。

「シノワビート・・・！　フィル達に何をした！！」

【何もしてないさ。　しいて言えば、我々に内蔵された『プログラム』を書き換えた、くらいだな。　さあドラゴンシリーズ、仕事だ。】

ガシャンガシャンッ・・・！

《・・・》

ギラムの問いかけに敵は静かに答えると、手にしていた小型ナイフを静かに投げ放ち、フィルスター達を縛っていたロープを切った。

すると重力に沿って彼等は転落し機械的な落下音が響くと同時に、3体から起動音がした。フィルスター達は音がした間もなく立ち上がり、それぞれが普段使用しているライフル、ロッド、ハンドガンが握られた。

「べ、ベリリー！？　何でっ！！」

【コイツ等にはもう主人への忠実心は無い。　あるのは我々と違う存在を抹消する、ただそれだけだ。　行け！！】

《ハッ！》

バツ！

「チッ！」

不意に向けられた刃を目にしメアンは動揺するも、敵は静かに主人への忠実心が無い事を告げた。

その直後に3体に彼等を襲うよう命令すると、普段とは違う声で彼等は返事をし武器を持ったまま突撃してきた。

慌てた3人は手軽な武器でそれぞれの武器を抑え込むように受身を取り、声が届かないのかと叫んだ。

「や、止めてベルちゃん！！」

「ベリリー！ アタシだよっ！ 何でこんな事をするのっ！！」

【ハッハッハッ！ 無駄な事を、いくら言おうと奴らの耳に届くものか！！】

しかし3体は何も返事をする事無く主人を攻撃し続け、不意を突いて遠距離からの攻撃も仕掛けてきた。

アリン達はそれを防ぐ様にシールドを手にし攻撃を防ぎ、何とかして攻撃を止められないかと戦いながら考えていた。

そんな彼等を見て敵は高笑いをして勝利を確信し、何時彼等が倒れるかと心待ちにしていた。その時だ。

「耳には届かないが、これならどうかな！？」

【何！】

不意にフィルスターからの攻撃を防いだギラムからの発言を聞き、敵は驚きながら彼の様子を見た。

そこには武器を持たず素手の状態でフィルスターに特攻を仕掛ける彼の姿があり、何をしようかと様子を見た。

自身に迫りくるギラムの動きを見た彼はライフルの銃口を彼に向けようとするも、弾丸を放つ前にギラムは銃を払い彼との間合いを詰めた。

そして、右手を構え5本の指を綺麗に揃えた、その瞬間。

「ハアアッ！！」

ベシンッ！！！！

《ッ・・・たあああっ！！！！》

彼はそのまま手刀をフィルスターの頭部へと放ち、良い音と共に彼からの発言を耳にした。その声はいつの間にか普段から良く耳にする彼の声になっており、両手からライフルを落とし彼は頭を押さえ痛がっていた。

「な、何すんだ主っ！！ 顔のパーツがまたへこんじまうじゃねえかつ！！ いっつつもより痛ってえ一撃かましやがってっ・・・！！」

「フィル、戻ったな・・・？」

「えっ・・・　・・・あっ、主が・・・居る！！ 主ッ！！」

「フィル！」

涙目になりながら講義をするフィルスターの発言を聞いて、ギラムは正気に戻ったかと問いかけた。

すると彼は落ち着きながら視界に映った主人の姿を見て歓喜し、彼の懐に飛び込んだ。ただの一撃の脳天チョップを受けただけで、簡単に戻ってしまったのだ。

【なっ！！ 何をした貴様！！】

「良くある方法を試したまでだ。 大体俺達の記憶って言うのは、衝撃やショックで簡単に戻っちゃうんだよ。 中枢回路に一撃をかませばそんくらいのデータ、フィルからしたら思い出物だ。」

とはいえ技術的な一撃を放ったわけでもなく、彼はただ手刀をフィルスターの脳天に放っただけ。

それを見かねた敵は動揺し何をしたのかと問いかけたが、彼は静かにそう答え機械特有の『衝撃による回路の遮断』を行っただけだと言った。

精密機械ほどよくある注意書きにある項目として上げられるのが『強い衝撃を与えないで下さい』であり、フィルスター達にもその注意書きは配属当初に渡されていた。

しかしわざと主人を弄る事のあるフィルスターには例外なく仕置きとして与えられることがしばしばあったため、ギラムはそれが有効ではないかと判断したのだ。

その結果、彼の思惑通り簡単に戻ったと言うものだ。

「おかげでまた形成修理の依頼出さなきゃいけなくなったけどなっ……」

「それは悪かったって。 まあ、無事で良かったぜ。 フィルっ！」

「ああ……主っ！」

バツ！

【！】

頭を押さえながら修理の依頼を出さないといけないと愚痴をこぼす彼に対し、ギラムは軽く詫びつつ目で彼にコンタクトを取った。

その直後2人はその場を駆け出しアリンとメアンの元へと向かい、それぞれ主人を襲うウィンドベルとラスベリーの元へと向かった。

彼等の動きを予測できなかった敵は動けない隙を付いて、ギラムは再び手刀を構え、フィルスターは持っていたライフルの銃身の良い位置を持ち、彼等にも同様に一撃を放った。

「ラスベリー、齒を食いしばれっ！！」

「ベル！ 許せッ！！」

ガァアンッ！！

《アッ……ウチッ！！》

《うっ……あああっ！！》

脳天にクリーンヒットすると、2人も同様に痛みながら頭を押さえその場にしゃがみ込んでしまった。

相方の様子を見たアリンとメアンも慌てて彼等の頭を抑え声をかけると、2人も正気に戻った様子で主人を見て手を握った。

全員が束縛から解放された事を知ると、ギラムとフィルスターは右手を出し親指を立てて互いにコンタクトを取った。

その後6人は一か所に集まり、敵を見た。

「さあ、これで攻撃の手は無くなった。 お前の目的は何か知らないが、フィル達と他のパートナーマシンナー達は返してもらうぜ。」

「ちゃんと礼をしてから帰ってやるから、まあ遠慮するんじゃねえよな。」

【クックックッ・・・まさか初歩的な手段で意識を戻させるとは、思ってもみなかった。だが、それで終わりだと思っているのか。】

「何・・・？」

形勢逆転と言わんばかりに彼等は武器を手にし敵を見て言い放ち、降参する様求めた。

無論フィルスター達からしたらそれだけで収まる気分ではない様子も露わにしており、3体とも武器の先端を敵に向け壊れるまでの礼をしてやると宣言していた。

しかし彼等の言動を聞いて敵は苦笑し、これだけで終わりだとは思っていないのかと問いかけた。

それを聞いたフィルスターは眉をひそめ相手を見た、その瞬間。

バチバチバチッ！

「ッああっ！！」

「わあああっ！！」

フィルスター達から強力な静電気が発生し、彼等は身体を抑えその場に屈みこんでしまった。それを見たギラム達は慌てて声をかけるも、フィルスター達は口々に離れる様言い、ぎこちない動きの中落とした武器を手にし先端を主人に向け出した。

「ある・・・じっ・・・ 離れて・・・くれ・・・」

「か・・・身体がっ・・・ 言う事を・・・聞きません！！」

「何っ・・・！ 今度は何をした！！」

彼等の苦しそうな声を聞いたギラムは再び敵に言い放つと、敵は少し離れた位置に操作盤を弄り彼等を操作している事を言った。

それを見かねたアリンは敵の居る場所に雷を落とすも、防御壁が展開され無力化されてしまった。

「！！」

【意識は戻ろうものなら、今度はこっちが意図的に操作するまでだ！ やれ！】

「い、いやだぁっ・・・！！ 主いいっ！！」

敵の命令に従いたくないフィルスター達の苦痛の叫びが、部屋に木霊した。

大波へ差し出す掌

意識をも意のままに操っていた敵のプログラムから、彼等を元に戻したギラム達。
しかし意識があるなしに問わず彼等を操る手段がある様子で、再び敵の間の手が彼等に襲い掛かって来た。
再び彼等の身体は自分の意志に反し動きだし、手にする武器で主人を叩く様指示されてしまっていた。

「主・・・ 逃げて、くれ・・・！」

身体が言う事を聞かず攻撃してしまいそうになりながらも、フィルスターは必死に体を抑えつつそう言った。
だが徐々に彼の方へと持っているライフルの銃口が向いてしまい、苦しそうにしていた。

「アリンさん・・・！ お願いします・・・逃げて、下さい！」

「・・・マスター ミーの体を・・・壊してくれ！」

同様にウィンドベルとラズベリーも持っている武器が主人の方へと向いてしまうためか、次々にそう言った。
主人達は彼らを助けたいと願うものの、その場から逃げても壊しても何の解決にならない。
だが時間が経つに連れてフィルスター達の制御も攻撃に移ってしまうため「早くなんとかしなければ」と考えていた。

「ギラムさん・・・ どうしたら。」

苦しそうに言う事の聞かない体のまま喋るウィンドベルを見て、アリンはギラムにそう問いかけた。
彼女も彼等と同じキャストのため、体がいう事を聞かないと言う事は辛いとはわかっていた。
だが機能を停止させてしまえば、その人格を失う確立も高いためどうすればいいのかがわからない様子だった。

「フィル、本当に壊されてもいいのか。 俺達に。」

「ギラム！」

アリンが心配そうに聞いてきた中、ギラムはフィルスター達に確認のためにと聞いた。

その問いかけにメアンは納得いかないかの様に叫んだ。

「いいぜ・・・俺が主を傷つけるくらいなら、主に止められる方がいい・・・」
「僕も・・・です、アリンさん・・・貴方を傷つけるなら・・・止めて、下さい。」
「マスター 時には犠牲も、必要なんだぜ・・・」

フィルスター達も体を必死に制御する中、次々とそう言い出した。

もはや自力でどうにかするにも出来ない事を彼らは理解していたため、止めてほしいと願っていた。

大好きな主人に怪我をさせてしまうくらいならば、人格を捨てても自らの身体を壊してほしい。

それだけ互いに相手の事を考えており、最善の手段を考えていた。

「駄目ギラム！ ベリリー達を壊すなんて！！」
「・・・」

だが彼等の意見に反して、メアンはそう言いギラムの腕にしがみついた。

無論ギラムも彼女と同じ考えをもっており、ましてや自分達の手で彼らを壊すなんて考えたくもなかった。

最愛のパートナーが制御不能と言っているにもかかわらず、意識はそのままのためやっぱり素の彼らだと言う事を理解していた。

だからこそ、それ以外の方法を考えていた。

アリンは互いの意見を聞き、やはり行動出来そうにないと両者の顔を順番に見ていた。

【さあ、やれ。やるんだ！！】

そんな彼らを見て楽しんでいた敵は、制御を必死に抑えていたフィルスター達に命令を出しつつ操作盤を弄った。

すると、彼らの身体に意思に反する行動をするための電流が流れ勝手に動き出した。

「クッ！！！！ 主！ 避けてくれ！！」

もはや攻撃の手が止まらなると考え、フィルスターはギラム達に避けるよう言った。

そう言った瞬間に、フィルスターの指が勝手に動き、ライフルから弾丸が飛び出した。弾丸は正確に主人達の元へと向かい、ギラムの隣に立っていたアリン目掛けて放たれた。

「チッ！」

その様子を見たギラムは左手にシールドを出し、その弾丸からアリン達を守った。弾丸が当たった拍子にシールドから腕に衝撃が走ったものの、ギラムは構わず撃たれる弾丸を全て防いでいた。

「主い！！」

「さあ、今度はお前達だ！」

「うわああっ！！」

フィルスターが彼らの心配をする中、今度はウィンドベル達にもその行動を行うための操作をされた。

その拍子にウィンドベル達も叫び、手にしていた武器で彼らに攻撃をしかけた。

「駄目・・・ やらせない！！」

ガキンッ！

フィルスターの攻撃から守ってくれているギラムが動けないことを知り、メアンはそう言い彼らの攻撃を同じくシールドで防いだ。

テクニックを防ぐにはこうするしか方法がないため、メアンも同様に守りに入っていた。

「マスター！」

「ベリリー諦めないで！！ アタシ達だって、諦めないんだからねっ！」

シールドで懸命に攻撃を防ぐメアンを見て、ラスベリーは叫んだ。

すると声に対しての返事を叫んだ後、彼女は武器をソードに持ち替え、彼らを操っている親玉めがけて特攻をかけた。

間に居るウィンドベルとラスベリーの身体を華麗に跳び越え、大きく跳躍し攻撃を放った。

「メアンさん！」

「アタシのベリリーに・・・！ 手を出すなあああ！！」

ガンッ！！

「・・・！！」

【ふっ、甘いな。】

ソードを敵の頭上目掛けて振り下ろすも、彼女の攻撃は途中で止まってしまった。驚きながら視線をおろすと、そこにはライフルで攻撃を受け止めているフィルスターの姿があった。

「悪い、メアン・・・！」

「フィルル！　なんで！」

【ハッハッハ！　こいつ等は私の支配下だ、どれだけ攻撃をこちらに向けようと。　意味はない！！】

どうやら強制的に動かされた様子で、フィルスターは申し訳なさそうに彼女に言った。

今の彼らには自由に行動できる余裕などなく、むしろ行動命令に頑張っって反抗するのが精一杯なのだ。

キャスト以上に処理能力が少ないマシナリーの彼等には、自らその宣言を断ち切る事もできない。

だからこそ敵の支配下になりやすく、今こうやって意識のある中手足を勝手に動かしていたのだ。

予想外ではあったが、彼らの事を思うとメアンはそれ以上は何も言えなかった。

「・・・ッ！　アタシ達から、どうしてベリリー達を奪うの！　仲良くすることが、そんなにいけない事なの！？」

重荷を退かすべくライフルの上にあったソードをずらすと、メアンは敵に向かって叫んだ。

合理的な行動が苦手な彼女にとって、最愛の相手であり仲良く行動できているラスベリーの事が大好きだった。

しかしそれを奪われるということは、彼女は1人になるという事を示している。

その事が気に食わず、軽く涙目になりながら問いかけていた。

【ハッ、もうこいつ等が下という関係性は欠落している。 だからこそ貴様らを倒し、我々マシナリーが天下を取るのだ！ キャスト以下とさげすまれた、我々が！！】

「だからって、こんな方法は間違ってるっ・・・！ 奪い合って、何の得が生まれるって言うの!？」

【馬鹿なメイドもどきに、そんなことがわかるはずがない！！ やれ！！】

ジャキンッ

「！！」

メアンからの問いかけに耳を貸さず、行いを続ける事を敵はあらわにし叫んだ。

すると彼女の周りにフィルスター達が集まり武器の先端を彼女に向け、再び攻撃しようとしていた。

無防備に近くなった彼女を取り囲んだフィルスター達に、敵は命令を再び送り込み3体は彼女に攻撃の手を向けようとしていた。

いつの間にか囲まれていた事を察し、メアンの表情は一変し防御手段をとろうとした。

すると、

「待ちなさい！」

【?】

攻撃の手が始まろうとしたその時、彼等の元に声が届いた。

声のした方角を見ると、そこにはギラムに守られていたアリンがその場にゆっくりと立ち上がりだした。

いつの間にか守っていた彼女が立ち上がったことを見て、隣に居た彼もまた彼女同様に立ち上がった。

「私達は同じキャストであり、マシナリーとの差別化を図った覚えはありません。 勝手な思い込みで、このような事を起こさないで下さい。」

【キャスト・・・！ 貴様なんかは何がわかる！！ 命令ばかりで動かされていた我々が、お前らみたいな存在をどれだけ憎んだか！】

「それに関する配慮が出来なかった事は、私達からもお詫びを申し上げる点だと存じております。・・・ですが。」

バッ

「憎しみや悲しみだけで、ベルちゃん達の行動の自由を奪っていいとは。誰も認めておりません。」

敵に対する発言への侘びもこめながら、アリンは思ったこと全てを相手に告げた。キャストはキャストであり、彼女達自身も差別化を図っているとは思ってはいない。同じ造られた存在に変わりはなく、必要以上の行動が出来ない事が唯一の差。その事をわかっているからこそ、ウィンドベル達の行動を奪うことに対して怒っているのだ。宣戦布告とばかりにそういい、彼女は右手にウォンドを召喚し先端を敵に向けた。まだテクニックを発動させてはいないため、単にウォンドを向けている状態だった。

【小賢しい・・・ 守られているお前が、何が出来ると言うのだ！】

「守られているからこそ、私自身に出来ることを精一杯やる。そう決めたのです。」

スッ

「停滞する時の流れ・・・ 加速する一撃を・・・！」

敵に言われた言葉に返答をしつつ、彼女は軽くウォンドを振りかざしテクニックを発動させた。するとウォンドからは光属性の白い粒子が飛び出し、敵めがけて数発の弾丸が飛び出したのだ。それを見て、敵は冷静にフィルスター達を操作した。

「クッ！！」

パシュンッ！

【甘いな。 そんなちんけなテクニックで】

「ええ、貴方には届きません。 ですが！」

ガシッ！

「！！ アリンさん！」

すると、弾丸テクニック全てをフィルスターとラスベリーが打ち落とし、攻撃が届く前に消失してしまった。

小さな攻撃であったことをけなしていると、彼女は敵の言う事を気にせずすでに別の行動を取っていた。

彼女のとった行動、それは行動制御から一時外されていたウィンドベルの確保。

彼を背面から抱き上げ、アリンは敵を見た。

「フィルちゃん達を操作する際に、待機する方が一人いらっしゃいます！！」

【まさか・・・！ それを！】

「外部操作を全て遮断！ 自己操作機能へ全て変更いたします！」

敵の行動の裏をかいた様子で、アリンはそう言い抱いたままの状態ウィンドベルの行動操作を全て書き換えだした。

軽くウオンドから雷属性のテクニックを発動させており、電気容量と書き換えを使い強制的に上書きした。

抱きかかえられたまま、ウィンドベルは脳内に新たに書き込まれていく情報を、邪魔されないよう意識しながら彼女に身を任せていた。

シューーン・・・

「・・・ベルちゃん。」

数十秒とかからず情報の上書きを終えると、ウオンドから放たれていた光が徐々に収まり静かになった。

その後抱きかかえる際に力を入れていた腕の力を抜きつつ、彼女はウィンドベルに声をかけた。

「アリンさんっ・・・！ 僕！」

「もういいんですよ。 私は貴方が、必要なんです。 ね？」

「っ・・・！ はいっ！！」

すると、もう敵側からの拘束から解き放たれたウィンドベルがおり、ロッドを手元から消し彼女に抱きついた。

よほど自らの主人へ手を出すということに心が痛んでいた様子で、詫びながら涙を流していた。そんな彼を見ながら、アリンは優しい眼差しを彼に向けていた。

【クッ、なんという事だ・・・！ あんなキャスト如きに、私のデータを書き換えられたと言うのか・・・！！】

2人のそんな様子を見て、親玉はいとも簡単に自らが構成したデータを書き換えられた事に対して、目を強く発行し動揺している様子を見せた。それだけ自身作であり作戦の大本だったからこそ、ものの数分とかからずに解かれてしまっては彼の顔がない。キャストとマシンリーが仲良くしていることに対しても、彼は驚いていた。

「悪いが、事実ベルの拘束はもう解かれた。 フィル達も、同様に返してもらおうぜ！」

ガシッ！

「主！！」

「ベリリー！！」

「マスター！」

敵が唾然としている隙をついて、ギラムとメアンも同様に最愛のパートナーの元へと向かい背後から抱きしめた。

それに応呼して、フィルスターとラスベリーも彼らに身を任せ武器を投げ捨てた。

【っ！ しまった！！】

「アリン、頼む！！」

「はいっ！・・・脳内に刻まれた、外部操作情報を全て抹消。 自己操作機能へ変更いたします！！」

隙を付かれ操作盤を弄ろうとしたのも束の間、ギラムはそう叫びアリンにもう一度同じプログラムを彼らに行うよう言った。

すると再びウオンドを片手に軽く眩き、2人の端末にアクセスしながらデータの書き換え作業に入った。

周囲に軽く機械音が聞こえだし、すでにアップデートが始まっているのが聞こえてきた。

【くそっ！ させるかあああ！！】

ジャキッ！

「！！」

そんな周囲の環境変化を目の当たりにし、敵は操作盤を捨て自らの手を巨大なライフルへと変換した。

銃器を手にする、そのまま銃口をアリンの額へと向け発砲する体制に入った。

それを目の当たりにし、情報の書き換え作業を行って身動きが取れないアリンは立ったままその光景を見た。

「アリン！！」

【死ねええ！ ボロクソキャストがあああ！！】

「ッ！！」

こちら身動きが取れないギラム達はその光景を目の当たりにし、彼女の名を叫んだ。

それとほぼ同時に敵はライフルのチャージショットの準備を終え、発砲しようとしていた。

もう避けられないと確信したのか、それでも作業を止めず彼女は目を瞑った。

その時、

バツ！！

「アリンさん！！」

彼女とライフルの間に、1つの鮮やかな青色のボディパーツが映った。

それは彼女のパートナーであり、つい先ほど拘束の手から逃れ自由に動けるようになったウィンドベルだった。

武器は先ほど地面に置いてしまったため、無防備な状態で彼女の盾になろうとしたのだ。

「！ ベルちゃん！？」

その光景を目の当たりにし、アリンは慌てて情報操作を中断し左手にシールドを構えようとした。

しかし、

バキューンッ……！

「ッ！」

「！！！」

その行動は一步遅く、親玉が発砲した弾丸がウィンドベルの身体に命中した。
顔と首元の接合部分に弾丸は命中し、致命的な損傷を与えたのが目に見えていた

ガシャンッ！

「ベルちゃん！！」

「ベル！！」

そのまま攻撃全てを受け止めると、ウィンドベルはそのまま地面に崩れ落ちた。
慌てたアリンは、その場に膝を付きコード等が取れないよう細心の注意を払いながら彼を抱きか
かえた。

ウィンドベルの中に書き加えられていたプログラムを抹消し、操作機能を回復させフィルスター達を助けようとした最中。

敵から発砲された弾丸を首元に受けてしまった彼は小さな電磁波を出しつつ崩れ落ちた。

「ベルちゃん、しっかりして下さい！」

「アリン……さん…… 僕、大丈夫ですから……」

手にしていたウォンドを捨て崩れ落ちたウィンドベルを抱きかかえながら、アリンは必死に彼の意識を確かめていた。

彼女の声に反応したウィンドベルは出来る限りの返事を返し、自分の事は構わずフィルスター達を助けて欲しいと言った。

しかし彼の願いに反し彼女は流れ出ようとする涙をこらえながら、彼の顔を見る事しか出来ずにいた。

【チッ、邪魔立てしやがって。】

「……」

目標としていた相手に一撃を与えられず庇ったウィンドベルを睨みながら、敵は静かに言い手元を元の姿へと戻した。

解決策となる相手を倒してしまえば計画は予定通り進み、敵の望む願望が叶えられる。

しかし彼等がことごとく計画を邪魔立てしてくる事もあってか、敵も怒りを乗り越し面倒そうにしていた。

【消えちまえばそれっきりの身体を使って、デカイ攻撃を小さい身体で受け止めるなんぞするからだ。 直にそいつは死ぬ、もう戻らん。】

「ベルちゃんっ……！」

【お前も大人しく壊れちまえ。 そうしたら二度と、そんな感情に揺るがずにいられる。】

「……」

小さい身体が受け止めた攻撃による損傷は大きく彼の意識は時期に亡くなると相手は宣言すると、アリンは瞳が閉じかけていた彼を強く抱きしめた。

手当てをしたくてもしてあげられない、自分と一緒に居てくれた彼が消えてしまう。

そう感じた不安な気持ちはとても大きく、敵の言った言葉を聞いて彼女の涙は一瞬止まった様に見えた。

その時の彼女の目には光を捕えておらず、何もかもを捨てそのまま消えた方が良くはないか。

悲しいがその気持ちを抱かずに済むのであれば、その方が彼のために良いのだろうかと彼女は静かに考え込んでいた。

『悲しい気持ちを考えず・・・　ずっと平和に・・・』

【憎しみや悲しみとは縁のない、永遠の暗い世界に・・・落ちろ！！】

そんな彼女を見た敵は、瞳を強く輝かせ勝利を確信したかのように再び腕を銃へと変え攻撃しようとした。

その時だ。

ガシッ！

【・・・ッ！？】

不意に定めていた狙いから銃身が逸れる感覚を覚え、敵は驚き辺りを見た。

すると敵の持っていた銃身を素手で掴んでいるフィルスターとラスベリーの姿があり、いつの間にか制御下を抜け出し自分達の意識でその行動に出ていたのだ。

途中で中断したプログラムを自らの考えで再構築し、結果的に自由を得た様だ。

「感情と縁のない世界に落ちろ・・・だと？　ふざけた事言うんじゃねえ！！

感情が無くて何が存在だ！！」

「ミー達に粗末ながらも存在する意識を捨て、ボディを捨てる事。　それがマシナリーのピースだと誰が決めた！！」

2人は相手の言った事に対し苛立ちを覚えそう叫ぶと、フィルスターは銃身を蹴り飛ばし、ラスベリーは渾身の力を拳に込め相手の顔を殴った。

不意に起こった出来事に対処できず敵は吹き飛ばされると、銃となっていた腕は取れ床に転がった。

【クッ・・・！！】

「俺達は俺達なりに一生懸命生きて、主のためにと最善を尽くして行動してきた！　それが俺達の今の幸せだ！！」

「！」

「それをユーが奪うと言い、マスターを悲しませるくらいなら・・・！」

「俺(ミー)はそんな使命、絶ってやらああ！！！」

「フィルちゃん・・・　ラズベリーさん・・・」

床に倒れ反撃が出来ない事を見ると、2人は相手の考えを全面否定し今の幸せが自分達の幸せであると主張した。

例え主人の命令に従う寂しい行動だと言われても、彼等はそれで満足し喜びが別で見出せるほどの主人に出会える事が出来た。

それだけで十分であるといい、主人を泣かせるくらいであればマシナリーの使命を捨てても良いと言った。

彼等の言葉を聞いて、壊れた方が良くと考えていたアリンは再び正気に戻り、涙を流した。

「フィルの言う事にしては、珍しく正論だし同意見だ。　シノワビート。」

【！】

「俺は今のフィルが平和かどうかは知らないが、少なくとも俺は今のフィルが必要だ。　それをお前が勝手に奪い平和だと言う世界に送ろうとするのなら、それは俺にとって邪魔な好意でしかない。　勝手なお節介を焼くくらいなら、それは俺達には遠慮してもらいたいな。」

そんな彼等の意見を聞いて、ギラムは意見に賛同しつつ敵の元へと向かって行った。

彼等の幸せが何処にあり、それを求める事は彼には解らず敵の言う事がもしかしたら正しいかもしれない。

しかし自分達にはパートナーマシナリーであるフィルスター達が必要であり、不要だと思う考えは邪魔な行為でしかないと言った。

もしそれが彼のお節介なのであれば、今からでも遠慮してもらいたいと言うのだった。

【誰が・・・遠慮なんぞするかっ！！】

しかし彼の意見に耳を傾けるシノワビートではなく、彼の意見に反発し相手は即座に起き上がり

無くなった腕を通常時の腕へと変え、手元を刃へ変えて襲い掛かった。

それを見かねた彼は瞬時に受け身の体制に入り攻撃を受け止めようと、武器を手にしガードをとった、その時。

「マァアグロアタァアーーーックッ！！」

バシンッ！！

【くああっ！！】

「そんな遠慮しなさいよ！ 貴方の言う考えが正しいかなんてアタシは知らないし、キャストの思考回路なんて解んなーい！ ……でも。」

彼の前に別の影が瞬時に入り込み、手にしていた巨大なマグロで打ち飛ばした。

ギラムの前に入って来たのはメアンであり、少々生臭い武器の尻尾を掴んだまま相手に説教をし出した。

先ほどまで普通のソードを持っていたのにも拘らず何処から持ってきたのかと疑問に思える光景であったが、ただ単に持ってきてはいたが使っていないと言う簡単な理由でもある。

そんな彼女が説教をし自分は馬鹿であり高度な思考回路は理解出来ない事を踏まえたうえで、話を続けこう言った。

「少なくとも『寂しい・辛い』って気持ちくらいは解るよ。アタシも受け入れられなかったけど、ベリリーが居てくれてずっと一緒だった。今は凄い幸せなんだよー」

【……】

「ギラムもね、あんな顔してるけどフィルルの事が大好き。互いに言いたい事を言い合ってるけど、それでもずっと一緒に居られて良いなってアタシは思う。アリンもそう、過去に何があったなんて解らないけど……ベルンと居るとね、すごい幸せそうなんだよ。」

寂しいと思う気持ちはヒューマンである自分にもあると言い、マシンアリーである相方と一緒に居るだけでとても幸せだと言った。

話をしながら武器を消し彼女は膝を曲げ、相手の前で笑顔で良いその場にいる別の主人達も同じ気持ちを持っていると告げるのだった。

彼女の言う事に口を挟まずに敵は聞いていると、不意に呟き混じりに声を放った。

【マシンアリーなんて……屑……に。お前等は……】

シノワビートは静かに言い振り上げようとした腕を途中で止め、落胆としながら言った。相手の目的は、最初からマシナリーの為であり自分自身のためでもあった。良い様に使いまわし使えなくなれば改良、もしくは破棄にする作り手達。粗末に扱われ良い様に労働させられる自分達には人権も無く、キャストの様に自由に行動する事もままならない。

そんな主人達が自分達よりも良い想いをし楽をしていると言うのなら、それ自体を変えたい。その気持ちこそが、彼の行動を起こした発端だった様だ。

「それこそ、お前の抱いた俺達への『感情』なんだろうな。接し方が悪い奴等も居る事は知ってるし、その辺に対しては俺達は詫げる事しか出来ない。ゴメンな、粗末にして。」

「アタシも、自分勝手にしちゃってゴメン。アタシは皆より馬鹿だから、許して貰えるか解らないけど・・・でも、皆と同じくらい詫びられるんだよー」

「どっちだよ、それ・・・」

寂しそうにする相手を見たギラムは静かにそう言い、マシナリーであっても感情を抱えている事を知り改めて詫びを言った。

自分達の前で行動するフィルスター達も周りのパートナーマシナリー達に比べて必要以上に人格がハッキリし、キャストレベルの思考回路を持っている。

だがそれは稀であり大本からは『欠陥品』と呼ばれる障害でもあったが、ギラムはあえてそれを報告せず返却もしなかった。

ウィンドベル達も最初は機械的な行動しか出来ていなかったが、主人の楽しそうな笑顔、寂しそうな泣き顔を見ているうちに『自分に最善の行動が出来るにはどうしたら良いのか』という考えが芽生え、今の彼等になっていた。

その事は3人は誰も否定しておらず、むしろ喜んで接しこれからも一緒に居て欲しいと願っているのだった。

そんな主人達の様子を見たシノワビートは静かに顔を上げ、少し横へと顔を逸らした。

【・・・君達は馬鹿か。大切な隣人を壊した相手に、何故楽しそうにして隙を見せるんだ。】

何故かいつの間にか和解の雰囲気となり大切な相手を壊したのにも拘らず、彼等は楽しそうに話をしている事に相手は理解出来なかった。

それだけの感情移入が出来る相手を傷つけた相手を壊そうとはせず、何故考えを理解しそう言わ

れなければならないのか。

オカシイと思った様子で質問すると、メアンとギラムは不思議そうな顔をした後互いに顔を見て軽く笑みを浮かべながら返事を返した。

「隙？ そうだねー・・・しいて言えー」

「感情的にはなっちまったが、俺達には構造を理解している上に処置が出来るメンツが居る・・・からかな。 フィル。」

【えっ・・・】

何処となく余裕のある表情であり、理由を告げた後2人は後方へと目を向けた。

それを見たシノワビートも遅れて顔を上げ前を見上げると、そこには応急処置として修理を施すマシンリー達の姿があった。

彼等の近くには様々なパーツが並んでおり、手元をドライバーへと変えフィルスター達は手を動かしていた。

「主は人使いが荒いんだよなー おまけに入口には妙なバリケード張りやがって・・・ 壊すのに手間かかったぞ。」

「必要な物は即手に入ったからオーケーさっ ベル、まだまだミー達はマスターのために働かないと駄目さっ」

「すみません・・・フィル、ラスベリーさん・・・」

いつの間にか主人達が彼の前に居た事により気付いていなかったが、フィルスターとラスベリーは一度部屋を後にした事を口々に言っていた。

床に置かれているパーツはその際に入手してきた物の様で、何時の間にかウィンドベルも話が出る程に回復していた。

先ほどまで壊れかけで何時意識が飛んでもおかしくない状態だったのにもかかわらず、疲労感だけを彼は見せていた。

「・・・ごめんなさい、ベルちゃんが身体を張って守って下さったので・・・慌ててしまいました。」

「俺もてっきり壊れるかと思ったが、場所が場所なだけに助かったな。」

【何時の間に、指示を・・・】

ウィンドベルのそばについていたアリンは、ギラム達の元へと移動し取り乱してしまったと彼に詫びを言った。

だが取り乱したのは彼も同じであり、修理を即座にする手段が無ければウィンドベルを無くして

しまっていたかもしれないと言いつつ、場所に感謝していた。

「ん、指示って言うほど指示は出してないぜ。 フィルもラズベリーも優秀だし、アイツ等はアイツ等なりに俺達のためにと頑張ってる。 幸せなマシンリーには、手解きはいらないうぜ。」

【・・・】

何度となく自分の予想をはるかに超える行動をする彼等を見て、シノワビートは驚きながらギラムに問いかけた。

すると彼は指示と言う指示は出していないと告げ、相方が元々優秀であり自分達のためにと思い自ら行動してくれていると言った。

先ほどフィルスター達の言った『幸せ』がそこにある事を改めて彼は言うと、今この場に居る3体には彼の言う手解きは必要ないだろうと言うのだった。

それを聞いた相手は再びウィンドベル達の元へと顔を向け、赤く輝かせていた瞳の光を徐々に落ち着かせていくのだった。

どうやら、彼の考えを理解しそれ以上の戦闘は無意味だと判断した様だ。

「まーそういう事だからねー シノワンッ！」

【シノワン！？】

「アタシ達と同じ、マシンリーの事は手を離して貰いたいなーって。 今更だけどお願いっ！ その代り、アタシ達が責任を持ってシノワン達が考えている事を他の人達にも教えてあげるからっ ね？」

静かに和解のムードとなったその場を乱したのは、またしてもお転婆メイドの一言だった。

いつの間にか彼に愛称を付けた様子で敵の事を呼び、無礼にも先ほどまでしていた行動をラズベリー達にはしないで欲しいと訴え出した。

とても敵対していた相手に言う様な口調ではないが、和解してしまえばそんな事は彼女にとってどうでも良い事の様だ。

【教えてって治るはずがないだろ。 何を言っているんだ貴様は。】

「その辺は、アタシ達のリーダーのギラムが何とかしてくれるってっ ね、ギラムう。」

「比較的面倒な事は、俺達はちまちま消化する事が仕事になってるからな。 それくらいは構わないし、フィル達もさっきの迎撃でこれ以上は何も求めてないと思うぜ。 まだ何かしたりないって言うんなら、その分は俺達が繕うからさ。」

「アタシ達は、そういう関係なんだよー シノワンっ」

【・・・】

軽く反論しながら相手は言うも、結局のところ難しい所は全てリーダーであるギラムがやってくれと彼女は言った。

他力本願過ぎる言い分に相手は呆れるも、やってくれるであろうギラムは苦笑しながら今までやって来た事がどれもそれに準ずる行動であったと良い、個人的には何も困る事は無いと言うのだった。

それを聞いたメアンは再度楽しそうにそう言い、シノワビートの手を握った。

「シノワビートさん。」

【・・・】

「私からもお願いします。 ギラムさん達は私達キャストを差別しませんし、フィルちゃん達の事を大切にしてくださいませ。 きっと、貴方の望む世界よりももっと良い方向に出来ます。 作り手の居ない世界は、きっと寂しいだけですから。」

呆れながら動かされるがまま相手は腕を動かされていると、不意に別の方向から彼の事を呼ぶ声がした。

そこに立っていたのはアリンであり、丁寧な口調で相手に頼みを入れ、これからして行くであろう結末よりももっと主人とマシンリーが良い方向になる結末が出来ると言った。

感情を失ったまま行動しては、何時しか彼の様なマシンリーが孤独となり寂しくなってしまう。

彼女もまた、そう考えている様だった。

【・・・ 勝手にしろ。】

そんな3人の言い分に呆れた様子でシノワビートは言うのと、握られていた手を静かに解き、部屋の出口へと向かって行った。

その際通り過ぎようとしていたフィルスター達の元へと立ち寄り、静かに身体を彼等の方へと向けた。

それを見たフィルスターは消していたライフルを手元に出そうと左手を動かしたが、それを見た相手は静かに首を振り攻撃するつもりはない意志を見せた。

彼の行動を見たフィルスターは手を下げると、シノワビートはウィンドベルの目を見る様に顔を動かしたと言った。

【・・・】

「・・・？」

【・・・　・・・済まなかった。　詫びは、また後日しよう。】

「はい・・・」

自分のやっていた行動が彼等にとって無意味であり、自分と同じように思考回路を持っているフィルスター達。

だが彼等には自分が得られなかった幸せがある事を改めて分かった事、そして先ほどまで行っていた事が彼等にとって不要であった事。

それを改めて詫び頭を下げると、彼は静かにそう言い部屋を後にして行ってしまった。

「・・・な一んか思った以上に違う結末になっちゃったねー　壊しても良かったんじゃないの？」

「お前は結局どうしたいんだ・・・　言い出したのはお前だろ、後から指示を出した身にもなれ。」

「ギラムならな一んでも出来るから、心配してないも一んっ　あっ、また食事してね??」

敵対していた相手がある場を去って行ってしまうと、メアンはいつも通りの口調でギラムに言った。

元々敵対していたのであれば壊してしまっても解決にはなっただであろうと言うも、それでは何故和解しようとしたのかが分からない。

結局どうしたいのかとギラムは呆れながら言い、その際にフィルスター達に軽く指示を出した身にもなれと言うのだった。

シノワビートには指示を出していないと言ったが、大まかな指示は彼は確かに出していた。

しかし何処に何を取って来いと言う明確な指示は出していなかったため、シノワビートに対し彼はそう言ったのだ。

「黙れ、しばらく拒否だ。」

「え————っ！！」

「えーじゃない。　・・・アリンは良かったのか、こんな終わり方で。」

そんなマイペース過ぎるお転婆メイドを軽くあしらうように注文を断ると、メアンはオーバーに驚いた声を上げ両手を頬に置いて驚いた。

だがそれくらいで『YES』という彼でもなく、次回は味見してもらえない事になってしまうのであった。

軽く返答を返し終わると、ギラムはアリンにこんな終わり方で良かったかと気にかけた。

彼の問いかけに対し彼女は静かに頷き、これで良かったと静かに言った。

「キャストがキャストを壊すって言うのは、私はあまり好きではありません。同族が仲良く慣れないと言う考えは無くしたいですが、意識そのものを亡くしたら・・・きっと。感情を持った私達には、寂しい世界でしかありません。」

「そうだな。フィル、応急処置は済んだか。」

「ああ、ベルも自力で防ぐ事はしてたみたいだし、破損は大きいけど修理に出せばすぐ元に戻るぜ。俺達はタフだからなっ」

「イエース。」

その後彼女の意見を聞き一件落ち着いた事を悟ると、ギラムはフィルスター達に処置は済んだかと確認を取った。

すると処置を終えたフィルスターとラスベリーが主人の元へと戻り、終わった事を告げつつ簡単には壊れないと主張した。

「じゃ、そろそろ引き上げるか。時間も時間だし、目撃されずに済む。連絡は俺から回しておくぜ。」

「はい。・・・ベルちゃん、ありがとう。」

「アリンさん・・・僕の方こそ、ありがとうございました。」

襲撃をかけたこの場でやるべきことを終えたことを確認すると、ギラムはそう言い工場を後にしようと部屋を出て行った。

それを見たフィルスター達も後に続き部屋を後にすると、アリンは静かに処置を終えたウィンドベルを抱き上げ、一番最後に部屋を後にして行った。

G R M社と一部リトルウィング社員しか知らない、支援機械達の脱走劇。

その結末は、孤独で認められないマシナリーの起こした『認めて欲しい』という願望から起こった事件なのであった。

－ E P I S O D E E N D －